

# 農耕・畜産・山樵用具

## ——民具から歴史を探る——

河野通明

### 図1 民具の新定義

はじめに

この部門ごとの解説は、本文の一覧表の説明で書ききれなかったことを、解説欄で補うという意味で設定されたものである。紙面が限られているため、あまり多くの内容は盛り込めないの、一覧表では何にどう使う道具かということに絞って、その道具のたどった歴史や伝来系譜はコラムなり解説に譲るという方向で調整した。

ところでいざ解説となると、私が自分の言葉で解説できる分野がほんのわずかしかないという事実と直面した。これは私の力量不足というよりも、われわれが参加する以前のプロジェクトの設計段階の問題なのだと思う。ある限られた予算で全体の人数も限られたなか、8つのテーマ班をつくり、その一つのが「民具の名称に関する基礎的研究」班には〈民具名一覧編〉と〈地域呼称一覧編〉を作成せよという絞り込みがなされ、〈地域呼称一覧編〉にはそれぞれの地域のベテラン研究者を充てて、残るメンバーで〈民具名一覧編〉を作るということになった。本来〈民具名一覧編〉の作成が目的なら、全民具をカバーしているのだから数十人で担当しなければならないところをわずか数人で担当することになったという経緯があるからである。ではどうするか。

現在の私の力量で解説できるところは解説するが、解説できないところは無理に解説しないことにした。無理をした解説は無味乾燥で読む気がしないだろうからである。研究の原点はワクワク感にある。もともと一覧表が本体であり、解説はプラスアルファなのだから、専門研究者として伸び伸びと自信をもって解説できることだけでいいのではないかという理解である。この方式を進めることをご了承いただきたい。

#### 1. 「民具」の新定義

解説の冒頭ということもあって「民具とは何か」について私案を述べておくことにしたい。これは2010年12月に開催された国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所の主催による第2回国際シンポジウム「『モノ』語り—民具・物質文化からみる人類文化—」の発表のなかで提起したものを再整理したもので、少しはすっきりした形になっているかと思うが、ただあくまで河野私案であって、この班の共通認識ではない。私案にしかすぎないものを、なぜおこ

#### A 「民具」という言葉の使われ方

◆現在、博物館・資料館に収集展示され、また教育委員会によって廃校の校舎などに保管された道具類が「民具」と呼ばれている。

この現状から、民具とは何かを  
帰納法で探ろう

#### B 寄贈側の「思い」、収集側の「思い」

◆民具が保管されるに至った経緯は、  
①地域住民による寄贈、寄託  
②博物館・資料館学芸員や文化財担当者の収集である。  
①地域住民は、自分や祖先たちが地域の自然や人々と関わりながら暮らしてきたことを子孫に伝えてもらうことを期待して、その証拠品として寄贈した。  
②学芸員や文化財担当者は、地域の歴史や暮らしを語り継ぐ証拠となる道具を選んで収集した。  
◆つまり民具は、地域住民からも、学芸員・文化財担当者からも、**地域社会の歴史や暮らしの語り部となることを期待されて集められた道具類**なのである。



以上の内容を煮詰めると

#### C 民具の新定義

民具とは、現役を引退して地域社会の歴史や暮らしの語り部となった庶民の道具類。

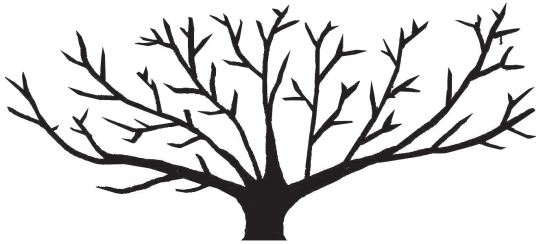
#### D 民具は「思い」が重なった資料

◆民具は地域住民の「思い」と、学芸員・文化財担当者の「思い」が折り重なった「重い」道具類であることを再確認しよう。  
◆そして民具は行政当局者によって粗大ゴミ扱われ、廃棄されようとしているが、軽々しく扱ってもらっては困ることを堂々と訴えよう。

がましくも提起するのかといえ、民具の「定義」にせよ、民具の「共通名」にせよ、どこかで誰かが決定して上から目線で押しつけるのではなく、定義や共通名について、あれこれ考えている者が「私はこう考えました。皆さんこれでどうですか?」と学界に提起し、それが批判的に継承されるなかで洗練されていくのがもっとも望ましいと考えるからである。

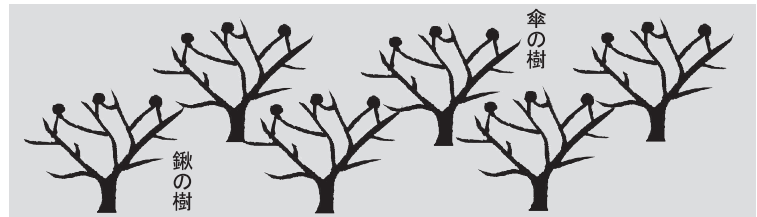
## 図2 生物進化の系統樹と民具の進化の系統樹

すべての生物が1本の幹から分かれるという大木  
先に行くほど枝分かれして交わることはない



生物の系統樹

人は用途に合わせて民具をつくる  
それぞれの民具は進化し伝播して小さな木となり林を形成  
枝の先は時々は絡まって癒着し混血型を生む



民具の系統樹の林

「民具とは何か」については1936年に洪沢敬三らが「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」という定義があるが、時代状況が変わってしまってこのままでは使えない。また日本民具学会発足後の1980年代前後にどこまでを民具と呼ぶか、民具の範囲について議論が交わされたが、それから時間が経って、それらの議論とは無関係に民具は普通の日本語として使われている。その日常使われている「民具」の用法から帰納法で本質を絞り込んで定義してみてもどうかというのが私案のアイデアである。図1にフローチャート式にまとめてみたので、それに沿って見ていこう。

まず、現在、博物館・資料館に収集展示され、また教育委員会によって廃校の校舎などに保管された道具類が「民具」と呼ばれている。この事実には誰も異論はないであろう。これら民具群が形成された経緯を見れば、①地域住民による寄贈・寄託と②博物館・資料館学芸員や文化財担当者の収集によって成り立っていることが分かる。ところで寄贈にせよ収集にせよ、漫然とあるものすべてが寄贈され収集されたわけではなく、何らかの基準で選択されて寄贈され収集されてきたものである。その基準とは、①地域住民は、自分や祖先たちが地域の自然や人々と関わりながら暮らしてきたことを子孫に伝えてもらうことを期待して、その証拠品として寄贈した。また②学芸員や文化財担当者は、地域の歴史や暮らしを語り継ぐ証拠となる道具を選んで収集した。つまり民具は、地域住民からも、学芸員・文化財担当者からも、「地域社会の歴史や暮らしの語り部」となることを期待されて集められた道具類なのである。以上の事情を踏まえて煮詰めると、

民具とは、現役を引退して地域社会の歴史や暮らしの語り部となった庶民の道具類

となる。本稿では「民具」をこの意味で使っていくことにしたい。

### 2. 生物の進化系統樹と民具の進化系統樹

本稿は〈民具名一覧編〉の農耕・畜産・山樵用具の「解説」をするわけだが、一覧表に対して何を解説するのかを明快に示すために、生物と民具の進化系統樹のあり方の違いを

図2に示した。生命は36億年ほど前に地球上に現れてから進化増殖を続け種の数を増やしながら今日にいたった。最初の1つの生命体から先に行くほど細かく分かれて進化する様子は1本の幹から枝分かれしてさらに小枝、その先に葉と分化する樹木の姿に似ていることから系統樹が描かれた。生物学ではそれに先立って大きな分類から細かい分類へ、動物界・植物界といった大区分の下に、

界 > 門 > 綱 > 目 > 科 > 属 > 種

と階層構造で分けて基本的な識別単位の種にいたる分類法が整備されていた。ダーウィンの進化論はそこに時間軸を持ち込んで3次元の思考に高めた結果、空に向かって成長する系統樹が生まれたともいえる。

民具でもたとえば鍬の場合は、

民具 > 農具 > 耕起具 > 鍬 > 備中鍬

と分けることが可能なように、民具の進化系統樹が構想された。

たしかに民具でも進化系統樹は描けるのだが、生物の系統樹とは根本的に違うところが2点ある。そのことを図示したのが図2で、その違いは

①生物の系統樹は1本の太い幹から分かれて先は無数に分かれるが、先同士がくっつくことはない。それに対して民具は人が工夫して作るものなので、便利なアイデアは真似られて、混血型が生まれる。

②生物の系統樹は太い幹から分かれて先は無数に分かれるが、先同士がくっつくことはない。それに対して民具は人が工夫して作るものなので、便利なアイデアは真似られて、混血型が生まれる。

という点である。

さて収蔵庫民具を整理することは、鍬なら何十本の鍬を進化の系統にしたがって分類しながら登録することであり、傘も進化の系統を念頭に蛇の目傘、普通のコウモリ傘、ジャンプ傘、折りたたみ傘と分類することであろう。この結果を一覧表化すれば、階層構造をもった鍬の分類表、傘の分類表が

できることになる。

ところで本書〈民具名一覧編〉は、左右の頁幅が限られたなかで一覧表にまとめるという必要上、階層構造を示す分類欄を掲げる幅の余裕もなく、ランクの異なる民具も一律横並びに配置する方法を採っている。これはそれなりに積極的な意味もあって、収蔵庫ではランクには無関係に民具は一律1点ずつの存在価値をもって場所を占めているので、それを探し検索するには、分類項目が何層にも重なる一覧表は実用的でなく、ランクを無視しても1点ずつの民具がそのまま頭出しで並ぶ方が実用的で使いやすいからである。

そこで「解説」の役割は、一覧表に欠けていた階層構造のある表を提示して、個々の民具の進化史上の位置を明確に示し、民具整理を通してわが市町村の歴史を読み出すために寄与することであろう。

ところで民具ごとに進化系統に沿った階層構造のある分類表を作成するという事は、何百本あるいは何千本という民具の系統樹の林に分け入って、その1本ごとの進化の筋道を読み出すことである。これがなかなか時間の要することで、三十数年かけてある程度進化の筋道の読み出しができたのは、鍬・踏鋤・犁・耩摺臼・万石通し・鞍ぐらいである。そこで解説するのはこの範囲に限らせてもらうことにした。

前置きが長くなりすぎたので、本論に入ろう。

### 3. 鍬

#### 1) 最初は木製鍬

鍬はまだ階層構造のある分類表が作れていないので、直接解説に入ろう。

鍬は稲作の伝来時に稲作民が生活用具の一環として持ち込んだものである。稲作民は最初は朝鮮半島から、遅れて中国江南地方から少数民族系の人々が日本列島に持ち込んだ。どちらもまだ鉄刃のついていない木製鍬である。

#### 2) 風呂鍬の出現

木製鍬に本格的な鉄刃がつくようになるのは古墳時代からで、U字形に曲がった鉄刃の内法にV字溝を切ったもの＝U字形鍬先を木部にはめ込んで風呂鍬の原型が出来上がったが、当時の木部はナスビ形鍬先と呼ばれるもので、反った柄を縛り付けるタイプであり、腰をかがめて使う鍬だった。

平安時代後期の經典見返し絵には、U字形鍬先を嵌めた木製鍬平＝風呂に長い柄が柄差しにされた典型的な風呂鍬が描かれ、近世初頭まで使われるが、今日の一般的な長柄鍬の出現は大化改新にともなう技術革新ではなかったかと思当をつけている。

#### 3) 丸先鍬から角先鍬へ

U字形鍬先をつけた風呂鍬は刃先が丸いので「丸先鍬」と呼ぶことにしよう。中世絵画によく描かれている中世の鍬である。それに対して近世絵画から民具まで、鍬の刃先は四

角くなっている。これを「角先鍬」と呼ぶことにしよう。古墳時代～中世の鍬が丸先なのは、丸先は角先に比べて尖っているので、振り下ろしたとき土によく食い込むからである。つまり角先にすると振り下ろしたときの接地面積が大きくなって単位面積当たりの圧力が低くなり、土に食い込まないので実用にならなかったからである。ところが近世以降民具にいたるまで、角先鍬が使われてきた。角先なのになぜ実用化したのか。

#### 4) 鍬の刃物化

角先なのになぜ実用化したのかのヒントになるのが、民具の鍬の「先掛け」である。民具の風呂鍬は先が減ってくると鍛冶屋に出して先掛けしてもらっていた。丸く減った先を切り落として、新たに刃金を鍛着するのである。角先鍬は刃先に刃金をつけて切れ味を良くしていたのである。では鍬の刃物化はいつ、どこで起こったのか。考古資料を追っていくと、角先鍬は大坂城・伊丹城・清洲城・安土城と織豊期の城郭で出土すること、文献史料では豊臣秀吉が家臣の姫路の鋳物師芥田氏に鍬の注文をしていること、芥田氏は他の大名からも注文を受けていることが確認できた。

戦国時代末期の織豊期の戦争は土木戦の様相を呈していた。彼らは500人規模の黒鍬衆＝工兵隊を抱えていて砦を築く一方、籠城する相手には城にトンネルを掘って地下水脈を断ち切って井戸を干上がらせたり、城を急造の堤防で囲んで川の水を注いで城を丸ごと沈水させたりした。この黒鍬衆の持つ黒鍬とは黒金＝鉄部分が大きくて目立つ鍬であり、角先鍬であったと考えられる。民具でも鍬平の大きい土木用の風呂鍬を「大鍬」「黒鍬」と呼んでいることからそう推定される。つまり角先鍬は戦国末期の統一戦争のなかで織田信長・豊臣秀吉によって開発・導入された人力パワーショベルだったのである。

#### 5) 平和な江戸時代に農村に浸透


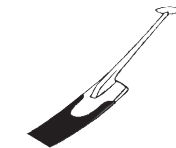
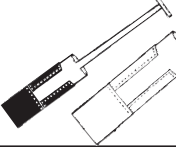
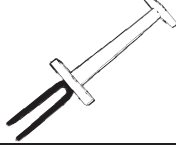
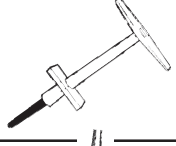

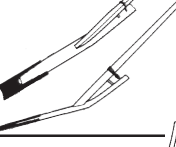
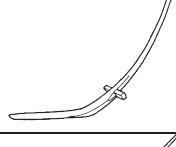
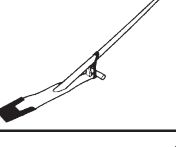
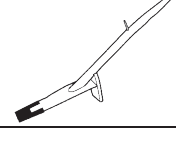
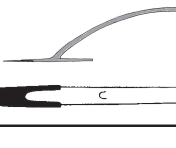
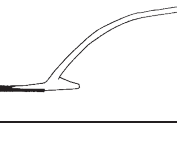
統一戦争が終わって平和な江戸時代を迎えると、利根川付け替えなど大規模土木工事、城下町建設、海岸の干潟干拓の新田開発と土木の季節を迎える。土木工事には農民が動員され、現場には黒鍬＝大型角先鍬が投入された。こうした機会を通して戦略兵器として開発された角先鍬は農具として農村に浸透して民具の鍬の主流となった。

教科書では備中鍬の出現を大きく取り上げているが、備中鍬の出現は18世紀中ごろ以降、それよりも150年早い17世紀初頭に角先鍬は農具としてデビューした。刃物化した鍬＝角先鍬の出現は、注目されてはいないが大きな技術革新だったことになる。

#### 6) 中国系ヒツ鍬の登場

鉄の豊富な中国では木製鍬平はやめて、日本で「ヒツ」と呼んでいる角形ソケットを備えた鍬平総鉄の鍬が使われてきた。そのうち17世紀中ごろに早くも伝わったのが「唐鍬」

図3 鋤と踏鋤の暫定的分類試案

鋤	短身鋤	木鋤	鋤		◆垂直に踏み込んで土を起こす農具・土木具で溝掘りには最適。◆弥生時代に稲作とともに木製鋤が伝来。◆古墳時代にU字形鉄先が付く。◆江戸時代に角形の刃物先に。
			江州鋤		◆根元で曲がった柄の付いた鋤。◆鋤平と柄とはほぼ平行だが、上下差があるので土をすくってはねやすい。◆滋賀県南部で使われる。
			関東鋤		◆『農具便利論』には「関東鋤」で紹介。◆通常の鋤は内法にV字溝を切った鋤先を木部に嵌め込むが、関東鋤は刃先と両耳と別々の鉄板を曲げて釘留めしたもの。
踏鋤	長身鋤	組合せ鋤	ヤンギョウ		◆南アルプス市東麓の火山礫地で使われる深耕向きの耕起具。◆7世紀後半に高句麗難民が持ち込んだ短身鋤が起源か。◆江戸時代に備中鋤に刺激されて一本鋤から分化したものか。
			一本鋤		◆南アルプス市山麓の火山礫地の耕起具。東京都西部の山間地でも使われる。◆7世紀後半に高句麗難民が持ち込んだ短身鋤が起源か。◆江戸時代に鍛冶屋の工夫で一本鋤に進化したものか。
			沓型鋤		長野県で使われる畑用の人力耕起具。◆斜め前方に踏み込んで柄を下げ土を起こす。◆沓形の鋤平に斜めに直棒柄を挿し込んだもの。◆組型は渡来人の持ち込んだ朝鮮系組合せ鋤か。
		蔓締鋤		長野県で使われる畑用の人力耕起具。◆斜め前方に踏み込んで柄を下げ土を起こす。◆板状鋤平の後端と柄の根元を蔓で縛って固定。◆組型は渡来人の持ち込んだ朝鮮系組合せ鋤か。	
		上越曲身鋤		◆一木造りの曲身踏鋤。◆形は華北～朝鮮半島の曲身鋤と同じ。◆鋤身・鐮・柄の3部材を鋤身と柄を一木造りにして2部材に簡略化。◆高句麗難民の入植時の工程省略か。	
		関東型	エンガ(柄鋤)		◆斜め前方に踏み込んで柄を下げ土を起こす畑の耕起具。◆長い鋤平に長い柄を柄組みにし、鋤尻と柄を縄で締めて固定した大型の踏鋤。◆北関東で使われ、エンガ・フンガ・フズキと呼ばれる。
		踏鋤	踏板鋤		◆斜め前方に踏み込んで柄を下げ土を起こす畑の耕起具。◆関東の踏鋤のなかでは小振り。◆房総半島と三浦半島に分布。◆大きな踏板と柄の中ほどの反転用把手が特徴。
		一木鋤	長野開田鋤		◆鋤身と柄が一木造りの鋤で、柄は枝の伸び方向に後湾する。◆東北地方の踏鋤と形は似るが、踏み込まない点からは別系統。◆渡来人の踏鋤を見た縄文系住民のコピーか。
		東北鋤		◆斜め前方に踏み込んで柄をひねって土を返す畑の耕起具。◆鋤身と柄が一木造りの鋤で、柄は枝の伸び方向に後湾する。◆対蝦夷戦争で持ち込まれた中部・関東型踏鋤の東北人によるコピーか。	

と呼ばれる細身で厚手の開墾鋤である。その100年後あたりに中国名「鉄搭」の鉄製又鋤＝備中鋤が伝わり、深耕鋤として普及した。明治時代に入ると四角い鋤平の「金鋤」が現れ、その鋤平を薄手で大きくしたのがホームセンターで売られている園芸鋤である。

#### 4. 鋤と踏鋤

図3は「鋤と踏鋤の暫定的分類試案」と題したように、現時点での形態分類と「一本鋤」「沓型鋤」「蔓締鋤」「上越曲身鋤」「踏板鋤」「長野開田鋤」「東北鋤」など共通名の試案を大胆に示したものである。さらに図4は踏鋤について、歴史的展開の図示を試みたものである。

歴史的には弥生時代に稲作民が持ち込んだのが普通の鋤と鋤で、古墳時代に朝鮮系渡来人が持ち込んだのが踏鋤とはっきり分かれる。ただ最初の欄の「鋤」のなかには、百済・高句麗難民の入植時の厳しい状況下で踏板を省略したのも含まれている可能性があることを付記しておきたい。

古墳時代の朝鮮系渡来人は、大きな踏板＝鐮の前後から鋤平と柄を挿し込んで栓を打って固定する鐮接合方式の曲身踏鋤を持ち込んだようだ。鋤平から柄までを一木造りにして工程は省略しながら形態はそのまま継承したのが新潟県上越地方の曲身踏鋤である。ただ朝鮮系の直系の子孫はこの上越地方の曲身踏鋤だけで、長野県のスキ・フミグワ・スキクワは朝鮮系踏鋤を縄文系住民がコピーしたもの、関東平野のエンガ・フンガ・フズキは朝鮮系踏鋤を弥生系住民がコピーしたものと考えられ、いずれも渡来人の朝鮮系踏鋤を周りの日本人がコピーしたタイプである。渡来人は地域社会では少数派であり、かつ地域社会に早く馴染もうと努めるので、独自の文化は残りにくいのであろう。

東北地方の一木造りの踏鋤は、中部型・関東型の踏鋤が対蝦夷戦争の過程で柵戸として入植した中部・関東農民が持ち込んだのを、敵側の蝦夷系農民

が見よう見まねでコピーしたものと考えられる。

この解説では鋤と踏鋤以外に犁、耨摺臼、千石通し・万石通し、鞍について、①分類欄、②共通名の案も含む民具名称、③図版、④解説文をセットにした一覧表を掲げている。これは民具のような形のある物的資料の系統研究の成果の表示方として模索し続けている実験的な表示法である。日本の学問では中国の漢字文化圏で育ってきた影響もあってか文章中心に記述を進め、民具はそれぞれ1点の挿絵としてばらばらに掲載し、系統樹も骨格だけを図版化して挿絵掲載するという方法が当然のようにおこなわれてきた。嵐嘉一『犁耕の発達史—近代農法の端緒—』（1977）の在来犁分類も中村たかを『日本の民具』（1981）の踏鋤の分類もこの文章中心・挿絵添付型の記述である。

論文を乗用車に譬えるなら著者は車のメーカーにあたる。これまでの方法はメーカー側が本文・図版・系統樹という部品をセットでユーザーに届け、ユーザーの頭の中で完成車に組み立ててもらう方法を探ってきた。ユーザーが在来犁や踏鋤の専門家なら間違いなく組み立てるであろうが、これまで犁や踏鋤に関心に向けてこなかった者には自分の頭の中で完成車に組み立てるのは難しいし間違いも起こる、また読まないで素通りされてしまう。そこでメーカー側で完成車に組み立てて誰にでもすぐに乗ってもらえる形で研究成果をユーザーの手に届けようというのがこの一覧表なのである。各地で民具の廃棄の話がささやかれるなか、民具の歴史研究の裾野を広げ、これまで耨摺臼や鞍に関心のなかった担当者にもその重要性を知ってもらって民具整理が一步でも進むことを期待しての表示法の試みである。

### 5. 共通名の選定基準

#### 1) スキとカラスキ

本文でも触れたが古代の首都圏であった奈良・京都では、スコップ・シャベル類をスキ（鋤）、牛に引かせる畜力耕耘機をカラスキと呼び分けてきた。歴史的に整理し直すと、

- ・弥生時代：稲作民がスキ（鋤）を持ち込んだ。
- ・古墳時代にU字形鉄製鋤先が伝わりクワと呼ばれた。
- ・古墳時代5世紀：大和政権が中国江南地方から馬鋤を導入。馬に引かせたのでウマガワと呼ばれた。
- ・5世紀後半～6世紀：渡来人が朝鮮系無床犁を持ち込んだ。牛に引かせたのでウシグワと呼ばれた。
- ・7世紀後半：大化改新政府が遣唐使を通して中国系長床犁を入手、日本向け改良を加えてモデル犁を全国に配付して普及を図った。カラスキと呼ばれた。

となる。

中国系長床犁が政府モデルとして示されると、政権お膝元の奈良盆地や大阪平野では、ウシグワと呼ばれた朝鮮系無床犁をあっさり捨てて全域がカラスキと呼ばれた中国系長床犁一色になった。その結果、

図4 踏鋤の伝来と歴史的展開

<p><b>A 紀元前10世紀、華北で踏鋤が誕生</b></p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆周代の紀元前10世紀ごろ、華北で畑作耕起具として「耒」が誕生。</li> <li>◆耒には2又の双刃型と単刃型。</li> <li>◆正倉院の子日手辛鋤は、華北の単刃曲身鋤が唐代に儀器となったもののコピー。</li> </ul>
<p><b>B 前4～2世紀、漢人が朝鮮半島に持ち込み 韓人に受け容れられ定着</b></p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆紀元前5～3世紀の戦国時代には華北の漢人難民が朝鮮半島に避難し、紀元前2世紀には漢は朝鮮半島を植民地にし、漢人が耒を持ち込んだ。</li> <li>◆周代の文字「耒」そっくりの済州島のタビは、漢人子孫が伝えたものか。</li> <li>◆漢人の子孫は曲身の耒の原型を保ったが、韓人社会に受容される過程で直柄のタイプも現れた。</li> <li>◆大型のT字形把手をもつ単刃・一木の短身鋤は朝鮮半島色が強く、朝鮮半島起源の可能性もある。</li> </ul>
<p><b>C 4～6世紀、渡来人が各地に持ち込み 中部・関東住民に受け容れられて定着</b></p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆4～6世紀、渡来人が直柄踏鋤を持ち込んだ。</li> <li>◆畑地が多い中部・関東地方に広まり、技術革新を引き起こした。</li> <li>◆渡来人持ち込み踏鋤の直系の子孫タイプは見つかっていない。</li> <li>◆長野県では縄文系住民が改良受容したと見られる杓型鋤と蔓縮鋤が使われている。</li> <li>◆関東地方では弥生系住民が改良受容したと見られるエンガと踏板鋤が使われている。</li> </ul>
<p><b>D 7世紀後半、高句麗難民が上越踏鋤持ち込み</b></p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆668年、高句麗は唐・新羅に攻め込まれて滅亡、ボートピープルとなった民衆は北陸に上陸、人目を避けて山間部で息を潜めて暮らした。</li> <li>◆朝鮮系組合せ鋤を一木造りに変え、鐺を差込踏板に変え簡略化。</li> </ul>
<p><b>E 7～9世紀、中部・関東農民が踏鋤を東北地方に持ち込み 蝦夷系住民がコピーして東北鋤に</b></p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆律令国家は対蝦夷戦争のなかで城柵に中部・関東農民を送り込み、彼らは踏鋤を持ち込んだ。</li> <li>◆踏鋤を遠くから見た蝦夷系住民が、コピー製作した。</li> <li>◆縄文系の一木造り技術で受容されたのが後湾柄をもつ東北鋤。</li> <li>◆東北各地・北海道に広まる。</li> </ul>

## 図5 民具の「共通名」選定基準

### ◆「共通名」の選定基準

- ① 古辞書・古文獻に出る歴史的名称を優先
- ② 江戸発の農具は江戸語が共通名
- ③ それがなければ地方名で適切なものを採用
- ④ それらもなければ内容を的確に表現した造語で対応

- ・在来スコップ・シャベル類=スキ（鋤）
- ・牛に引かせる畜力耕耘機=カラスキ（犁）

の2本立てとなり、それぞれの時代の古辞書にも載せられ、これらの名称が標準語扱いされて20世紀まで継承された。

ところが明治10年代後半から福岡県の篤農家である抱持立犁を深耕可能な犁として、馬耕教師を全国的に派遣して抱持立犁と馬耕技術を広めて回った。駒場農学校で教鞭を執っていたドイツ人マックス・フェスカが抱持立犁を高く評価したことから、犁をスキと呼ぶ福岡方言が農学界の標準語となり、農学関係書を通して知識人間に広まった。その結果、スキには①在来スコップ・シャベル類、②牛に引かせる畜力耕耘機の2つが含まれてしまうことになり、名称の混乱を招いた。

だが時代は変わった。犁は現役を引退して地域の歴史の語り部となった。この機会に7世紀以来1300年の歴史をもつ、

- ・在来スコップ・シャベル類=スキ（鋤）
- ・牛に引かせる畜力耕耘機=カラスキ（犁）

という歴史的名称に戻して共通名にしようではないか、というのが本書の提案である。

### 2) 共通名の選定基準の提案

いま犁（すき）を改めて犁（からすき）を共通名にしようとして提案したが、共通名はどんな基準で選定すればいいのか、図5に試案を提起した。それに沿ってみていこう。

#### ① 文献・古辞書に出る歴史的名称を優先

古墳時代～奈良時代は奈良盆地が政治・文化の中心で、平安遷都以降は江戸幕府ができて京都が文化の中心であり続けた。そこで『和名類聚抄』（931～38）など古辞書や古文獻に出る歴史的名称をまず優先すべきであろう。犁（からすき）を共通名にという提案もこの根拠によるもので、麦打ちなどに使う回転打穀棒の唐竿は関東ではクルリ棒という方言で呼ばれているが、『和名類聚抄』に出るカラサオが共通名で、クルリ棒は関東の地方名であろう。

#### ② 江戸発の農具は江戸語が共通名

①の基準にしたがえば一般的には関西語が共通名となるが、江戸で貞享元年～2年（1684～85）頃に開発された台所用具の千石通しと農具の万石通しは、直後に相次いで大坂に伝わったため大坂では千石通しと万石通しの名称の混同が起きた。それに対して発祥地の江戸圏＝関東地方では台所用具は千石通し、農具は万石通しと今日に至るまで物と名称との

混乱は起こっておらず農具の万石通しは一般に「万石」と呼ばれている。江戸発の農具は江戸語を共通名とすればいい。

#### ③ それがなければ地方名で適切なものを採用

初摺臼には後に図11に取り上げるように、木製で2人が座位で縄を引く朝鮮系のものと、籠に詰めた粘土に櫛の歯を打ち込んで数人で全回転させる中国系のものがある。前者の関西での古代語は「摺臼」で、後者が出現して以降は前者は「木臼」、後者は「土臼」と呼び分けていたが、「木臼」では餅搗き臼の木製臼なので混乱が生じるため関西語は共通名には使えない。それに対して東北地方では、木製のものを「木摺臼」、粘土に櫛の歯を打ち込んだものを「土摺臼」と呼び分けており、この双方には「摺臼」の言葉が入っているので餅搗き臼との混同も起こらず、名称が実体を表した適切な言葉となっており研究者も使い始めている。そこで東北地方語の「木摺臼」「土摺臼」を共通名にしようとして提案した。

#### ④ それらもなければ内容を的確に表現した造語で対応

足踏みの米搗き臼は『和名類聚抄』『源氏物語』にカラス（碓）と出ており、これを共通名にすべきであるが、関東地方では土摺臼をカラスと呼んでいる。関東地方は人口が多いうえに関東方言を標準語と勘違いしている人が多いので、足踏みの米搗き臼の共通名をカラス（碓）にするには困難がともなう。それにカラスという表現には足踏み式という要素が盛り込まれていないという弱点もある。そこで本書では『物類称呼』（1707）の用例を採って「踏臼」を共通名にしようとして提案した。

共通名の選定基準としては、上記の①～④が妥当ではないかと思うが、どうだろうか。

## 6. 犁

### 1) 「日本人の発明」と信じられてきた民具

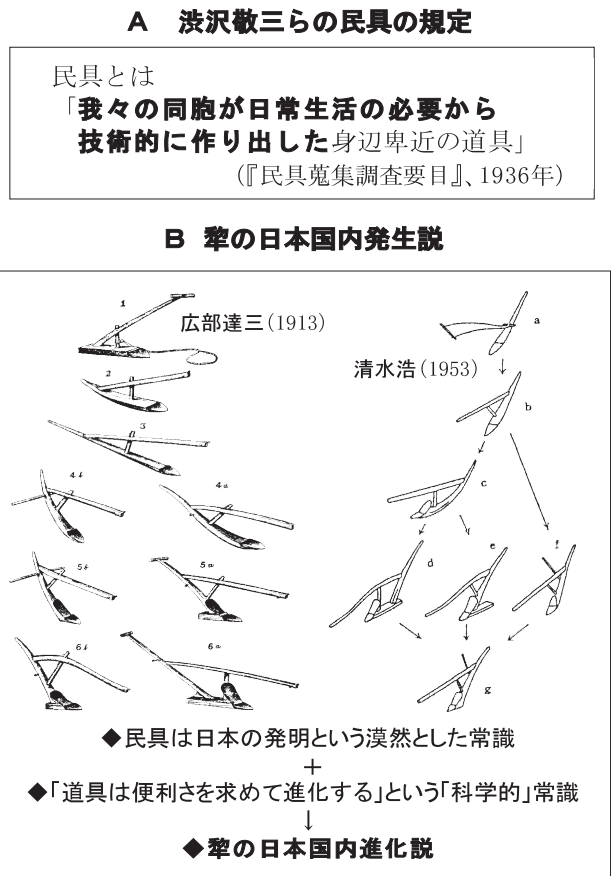
第二次大戦前後のころまで、民具は日本人が発明したものと漠然と信じられていたようだ。図6にその辺りをまとめたが、たとえば日本の民具研究の創始者である渋沢敬三らがまとめた民具の定義は、

「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した  
身辺卑近の道具」（『民具蒐集調査要目』、1936年）

というもので、民具は「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した」と考えられていて、中国や朝鮮半島からの伝来は視野に入っていない。これは渋沢に限らず当時の知識人の一般的な認識だったようで、日本の犁の歴史についても、広部達三や清水浩は、犁は日本国内で簡単な人引き犁から牛の引く本格的な畜力犁に進化・発展してきたとの理解から、犁耕進化系統図を提示してきた。

農学者が犁の日本国内進化説を主張し続けた背景には、農学者の多くは研究室に籠もっていて在来犁の現状を調査しなかったことが大きいと思われる。こうしたなかで森周六は現場を重視した実践派だったが、彼の関心は犁メーカーと組んで近代短床犁の改良に努めるなど、犁耕を中心とした農業発

図6 「民具は日本人の発明」と漠然と信じられてきた



展への寄与であり、過去の犁史には関心を向けなかった。戦後に九州を舞台に研究を深めた嵐嘉一は『犁耕の発達史—近代農法の端緒—』(1977)を世に問うたが、フィールドが九州に限られたため、在来犁から歴史情報を引き出すまでにはいたらなかった。

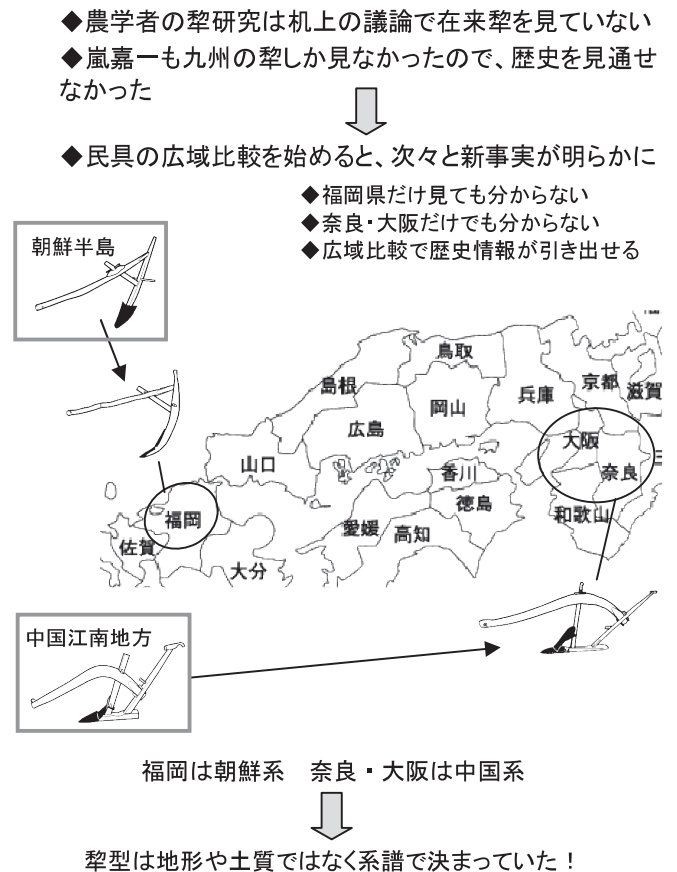
2) 犁型は朝鮮系か中国系かで決まる

図7に示したように、福岡県では抱持立犁と呼ばれた無床犁が使われる一方、奈良盆地や大阪平野では曲轅長床犁が使われてきた。福岡県では水田でも畑でも平場の田でも山手の棚田でも抱持立犁が使われるのに対して、奈良や大阪では水田でも畑でも、平場の田でも山手の棚田でも曲轅長床犁が使われてきた。福岡県の抱持立犁は朝鮮半島の三角杵無床犁の後裔であることは明らかで、他方、奈良や大阪の曲轅長床犁は中国江南地方の曲轅長床犁の後裔であることは明らかである。犁型は地形や土質にはまったく関係なく、犁の伝来系譜によって決められていたのであり、福岡県に朝鮮系無床犁、奈良・大阪に中国系曲轅長床犁が使われるようになったのはそれぞれの歴史的背景があるはずで、在来犁の形態の違いから地域古代史を復原する道が開かれた。「民具からの歴史学」の誕生である。

3) 「大化改新政府の長床犁導入政策」説の提起

ところで朝鮮系犁は渡来人の持ち込みで説明できるが、中

図7 犁型は地形や土質ではなく系譜で決まる



国人の大挙渡来はないにもかかわらず中国系長床犁は九州から関東まで各地で見られる。長床犁の古辞書の初見は8世紀初頭の「楊氏漢語抄」(717~24)、この時点で辞書に載るほど普及していたなら伝来は7世紀となり、日中の民間交流はまだなかったので、大化改新政府が稲作民化政策として遣唐使の持ち帰った唐の犁を基に政府モデル犁を作り、全国の評督(のちの郡司)に送付してコピーさせて普及を図ったとの「大化改新政府の長床犁導入政策」説を立てた。

折から香川・兵庫・長野県から7世紀の長床犁が出土してきて中国・朝鮮にはない一木犁へらを備えていた。香川・兵庫・長野県と離れた地域から中国・朝鮮にはない一木犁へらを備えた犁が揃って出土したのでこれが政府モデル犁のコピーと考えられ、先の仮説は遺物で検証されて検証度1、★の学説に昇格した。その後、九州から関東の在来犁にも一木犁へらの痕跡が多数見つかれば仮説の正しさが民具からも検証され、検証度2、★★の学説に昇格した。

4) 犁の農学者の三分法と新三分法

犁の分類では、図8Aの「無床犁」「短床犁」「長床犁」という三分法が永らくおこなわれてきた。無床犁は安定性が悪く扱いにくいのが深く耕することができるのに対して、長床犁は安定性は抜群に良い反面、浅くしか耕せないという欠陥もっていた。短床犁はその双方の良さを合わせたもので、近代犁耕の主役となった、というものである。

図8 犁の三分法と新三分法

A 農学者の三分法

無床犁	短床犁	長床犁
◆無床犁は深耕、長床犁は浅耕、短床犁は中間という学説にもとづく分類法 ◆無床犁にも浅耕型があり長床犁も必要な深さは耕せたなど誤解を含んだ学説 ◆犁耕で食糧生産を支えようとしていた時代性は反映していて今や文化遺産		

B 犁から地域史情報を読み出すための新三分法

朝鮮系三角枠犁	朝鮮・中国混血型犁	中国系四角枠犁 (政府モデル系)
a 3つの部材で三角枠 b 直棒の犁轅(直轅) c 犁先で接地(無床)	◆Aとa、Bとb、Cとc、Dがそれぞれ自由に選ばれた結果、各地で多様な犁型が生まれた。	A 4つの部材で四角枠 B 曲がった犁轅(曲轅) C 長い犁床(長床) D 畿外型は一木犁へら
韓国の犁 a=三角枠 b=直轅 c=無床→	A,b,C  A,b,C,D  a,b,C  a,B,C  a,b,C,D  a,b,C 	畿内モデル復原図 A=四角枠 B=曲轅 C=長床  A,B,C  畿外モデル復原図 A,B,C  D  D=一木犁へら A,B,C,D 
★パーツごとに分析することで民具から歴史の読み出しが可能に		

図9 新三分法から地域古代史の読み出しへ

★犁型から地域古代史を復原する公式

- ① 政府モデル犁をそのまま継承している地域
  - 政権お膝元で政府モデル犁に全面乗り換え(奈良・大阪)
  - 第2期以降の渡来人が来ていなかった地域(畿外)
- ② 混血型のあるところ
  - 第2期の渡来人が来ていた地域かその周辺
- ③ 非混血の朝鮮系無床犁のある地域
  - 政府モデル犁の並を被っていないので最後の渡来人
  - 百済・高句麗難民が入植した地域

この三分法と解説は間違いのない真理のように扱われてきたが、実際には長床犁は実用上十分な深さは耕せていたし、無床犁には抱持立犁とは形の異なる長体無床犁があって、こちらの方は無床犁にもかかわらず深耕は苦手だった。それはさておき、田畑を深く耕せるかどうかを基準にした農学者の三分法には「牛馬耕で近代日本の食糧生産を支えるのだ」という農業界、農学関係者たちの意気込みが感じられて、この三分法自体が近代日本の文化遺産といえるだろう。

しかし時代は変わった。近代日本の食糧生産を支えてきた犁たちは現役を引退して、地域社会の歴史や暮らしを語ることが新たな役割となった。語り部が仕事となったのなら、彼らに地域社会の歴史や暮らしを語ってもらおうではないか、と設定したのが犁の新三分法である。

朝鮮系稲作民の渡来には、

- ・第1期 4世紀末～5世紀 朝鮮半島南部ではまだ犁は使われていない
- ・第2期 5世紀後半～6世紀 第2期渡来人が牛と朝鮮系三角枠犁を持ち込んだ
- ・第3期 7世紀後半の百済滅亡(663)、高句麗滅亡(668)時の難民。入植地で故郷の犁を製作

の3つの波があった。第1期の頃は朝鮮半島南部ではまだ犁耕は普及していなかったようで日本に持ち込まれた痕跡はなく、在来犁からは第1期渡来人の動向は探れない。

牛と犁が持ち込まれたのは第2期からで彼らは入植地で牛に犁を引かせて耕し始めた。周りの日本人は興味津々、犁は牛に引かせるのでウシグワと呼んで、やがて自分も習って日本人集落でも使われ始めた。その後、大化改新政府が中国系長床犁の政府モデル犁を評督(のちの郡司)に配付、政治的圧力を伴って普及が図られると、朝鮮系無床犁を使っていた地域では、手慣れた朝鮮系犁と政府モデル犁との混血が起こる。とくに政府モデル犁の中国系長床犁の長い犁床は、誰の目にも安定が良さそうなので取り入れられた。他方、渡来人が来ていなかった犁耕処女地では、政府モデル犁が素直に受容される。また百済難民・高句麗難民の入植地では、一過性の政府モデル犁配付が終わった後の入植だったと考えられ、非混血の純粋朝鮮系犁が製作され継



承されている。

この結果、在来犁の犁型は、

- ・中国系四角枠犁＝政府モデル犁の後裔
- ・朝鮮系・中国系混血型犁
- ・朝鮮系三角枠犁

の3種類に分けることができる。これが図8Bの「犁から地域史情報を読み出すための新三分法」である。

ここで在来犁の部品ごとに朝鮮系か中国系か読み分ける分析法を説明しておこう。

まず骨格構造から見ていくと、朝鮮系犁は犁轆・犁柱・犁身の3つの部材を組み合わせて三角枠構造(a)となるのに対して、中国系犁は犁轆・犁柱・犁柄・犁床の4つの部材を組み合わせて四角枠構造(A)となる。

犁轆は朝鮮系犁は直棒で直轆(b)なのに対して、中国系犁はへの字あるいは虹のように曲がった曲轆(B)となる。

朝鮮系犁は犁床がなく犁先で接地する無床犁(c)なのに対して、中国系犁は長い犁床をもった長床犁(C)である。

さて第2期渡来人が来ていた地方ではa, b, cの組み合わせの朝鮮系無床犁が使われていたが、ここに大化改新政府は評督(のちの郡司)のもとにA, B, Cの組み合わせの中国系の四角枠長床犁の実物模型を送りつけて普及を図った。これには政治的圧力が伴っていたが奨励策であり、どの程度受容したかのチェックが入らないことは分かっていたので、人々は使い慣れた朝鮮系犁をベースに見るからに安定の良さそうな政府モデル長床犁の要素を採り入れてMy犁を作るようになった。そうなれば部品ごとに朝鮮系を選ぶか中国系を選ぶかは製作者に任されるので、各地で千差万別の多様な犁型が生まれることになった。

図8Bの朝鮮・中国混血型犁欄の一番上のA, b, C犁は鳥取県倉吉市の在来犁だが、かつて渡来人が来ていたことはbの直轆から証明できるが、古代の倉吉の人々は化改新政府に親近感を持っていたのか犁床Cと四角枠構造Aを採り入れて直轆長床犁を作った。それ以降は大きな変化はなく20世紀まで継承されてきたのである。

この新三分法で一つ明らかになったことがある。それは「日本の農具が各地で形が違うのは、代々の農民たちがその土地の地形や土質に合わせて改良した結果」だと説明されてきた。ところが在来犁についていえば、その多様性は地形や土質は地形や土質にはまったく無関係で、混血型の多様性が全体を多様なものにしていたのである。

## 5) 犁型から地域古代史を復原する「公式」

さて新三分法が決まれば、これを逆手に取ることで、図9の「犁型から地域古代史を復原する「公式」」を導くことができる。

- ①政府モデル犁をそのまま継承している地域 → 第2期以降の渡来人が来ていなかった地域
- ②混血型のあるところ → 第2期の渡来人が来ていた地域かその周辺

③非混血の朝鮮系無床犁のある地域 → 百済・高句麗難民が入植した地域

大化改新政府のお膝元の奈良盆地・大阪平野では、使い慣れた朝鮮系犁は一切捨てて、全域が政府モデル犁となった。畿外の渡来人が来ていなかった地域では政府モデル犁をそのまま受容されたので、①のケースとなる。

これで在来犁の形態から地域古代史を読み出す準備は整った。さあ、皆さんの地域はどうか。早速収蔵庫を点検してみようではないか。

## 6) 犁類の分類試案

図10は、犁類の歴史的展開過程を踏まえた分類試案である。犁類はまず牛馬に引かせる畜力耕起具である「犁」(カラスキ)と人が牛馬の代わりに勤める「人力犁」に大別しよう。

まず畜力用の犁から見ていくと、「在来犁」と「近代短床犁」に2分して考えよう。在来犁は先ほど図8Bで見たように、5～6世紀に朝鮮系渡来人が朝鮮系無床犁を持ち込み、それが周辺の日本人集落にも広まった段階で大化改新政府が中国系長床犁のモデル犁を各地の評督(のちの郡司)に送りつけて普及を図ったため、朝鮮系犁を使っていた地域では混血型犁が生まれ、犁耕処女地には政府モデル犁が受容され定着した。このモデル犁配付以降に渡来した百済・高句麗難民の入植地では朝鮮系無床犁がそのまま継承された。この在来犁の基本形は660年代に決まり、その後20世紀にいたるまで形を変えていない。形を変えていないからこそ在来犁の犁型から地域ごとの個性ある古代史が復原できるのである。

「近代短床犁」は、明治の末年に九州の混血型短床犁をベースに開発され、大正・昭和期に普及し、近代日本の食糧生産を支えてきた功労者である。鉄製ボルトや鉄製ジョイントを含む近代短床犁は、メーカー品であり地域の個性に乏しいことから民俗研究者・民具研究者にはあまり注目されないが、近代の地域の食糧生産を支えてきた功労者であることを再確認して顕彰し継承していきたいものである。

「人力犁」は牛の引く犁の祖型と見なされて「人力犁 → 畜力犁」という犁の発達史上の痕跡とする研究が中国でも日本でも見られたが、これは大きな勘違いで、一頭引き犁が普及した後に東アジア規模の政治変動で故国を追われた人々が流浪の末の定着先で牛が手に入らなくて困った末に人が牛代わりに犁を引いたことが始まりで定型農具化したものであり、犁の祖型ではなく派生型だったのである。

## 7. 耨摺臼

図11は耨摺臼の伝来系譜に沿った分類表で、東アジアの列島国の日本へは、上欄の朝鮮半島からと、下欄の中国江南地方から民具が伝来するという歴史の基本パターンがある。朝鮮半島では日本の古墳時代に往復回転の木摺臼が開発され、渡来人によって日本に持ち込まれた。それから約千年後、中国江南地方で日本の室町時代に当たる明代に全回転の

図 10 犁類の歴史展開を踏まえた分類試案

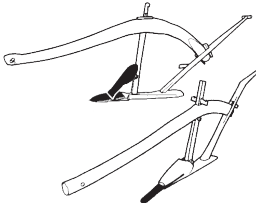
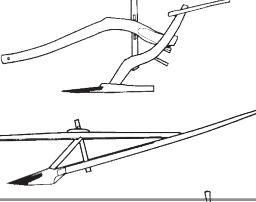
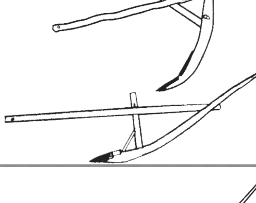
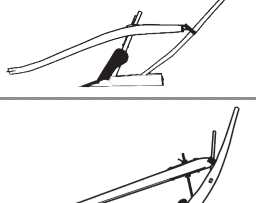
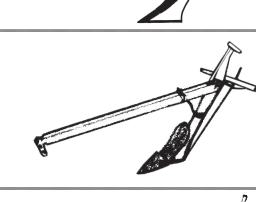
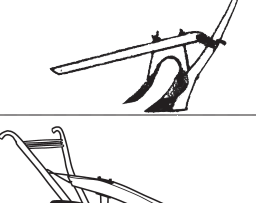
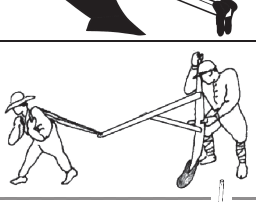
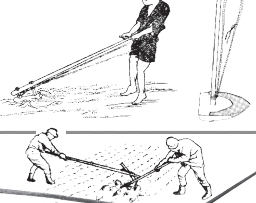
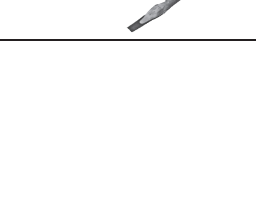
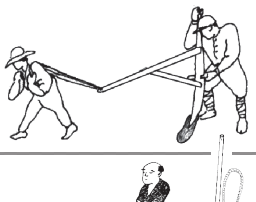
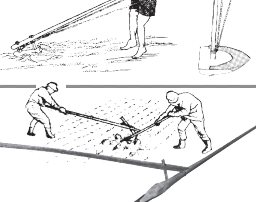


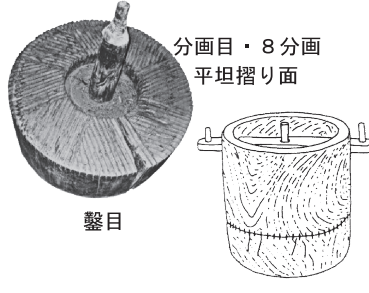
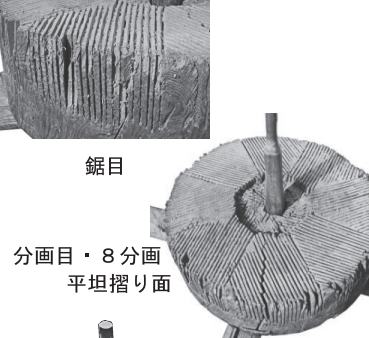

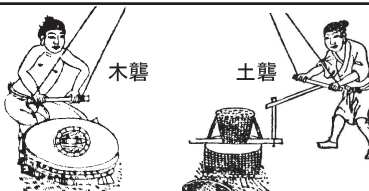
耕 起 具	犁 (カラスキ) (牛馬に牽引させる畜力耕起具)	在 来 犁	中国系犁		◆中国系犁の特長は、①曲がった犁轅(曲轅)、②4つの部材を組み合わせた四角枠構造、③長い犁床(長床犁)である。◆7世紀後半に天智政権が遣唐使を通して中国江南犁を導入、日本向けに改造した政府モデル犁を各地の有力者に配付して、管下に広めさせた。◆政權お藤元の奈良・大阪では政府モデル犁への全面乗り換えで全域が長床犁。◆畿外で曲轅長床犁のある地方は、渡来人の来なかった地域と考えられる。
			中朝混血型犁		◆5世紀後半から6世紀にきた第2期渡来人は、関東以南の各地に牛と犁を持ち込んだ。これが日本の犁耕の始まりである。◆その150年ほどのちに天智政権が中国系の政府モデル長床犁の使用を押しつけたため、朝鮮系犁を使っていた地方では、手慣れた朝鮮系犁と政府モデル長床犁との混血が起こった。◆政府モデル犁から何を受け取るかの選択はまちまちなので、多種多様な犁型が生まれた。日本犁の多様性はこの混血型の存在による。
			朝鮮系犁		◆朝鮮系犁の特長は、①直棒で前に下がる下降犁轅、②3つの部材を組み合わせた三角枠構造、③犁床がなく犁先で接地する無床犁である。◆663年百済滅亡、668年高句麗滅亡で多くの難民が日本にきたが、天智政権の政府モデル犁配付の波が過ぎた後だったので、影響を受けなかった。したがって朝鮮系無床犁のある地域は百済・高句麗難民の入植地と考えられる。
		改良長床犁		◆近代短床犁の出現の影響を受けて、在来長床犁の改良型が現れた。◆改良長床犁の特徴は、①近代短床犁に倣って全長を少し短くする。②村工場製の規格品である。③鉄製ジョイント・ボルト方式の耕深調節・ニス仕上げなどの工夫がある。◆兵庫県伊丹市の前田式、滋賀県守山の秋耕犁は地域のヒット作。	
		近代短床犁	単用犁		◆三角枠短床犁で、鉄製ボルト犁柱で、犁轅と犁身は鉄製ジョイントで繋ぎ、鉄製曲面へらを備えたものを近代短床犁と呼ぶ。◆熊本県の東洋社の始祖が1900年に特許を取ったのが始まりで、深耕向きでそこその安定性をもっていることから近代農業の主役となった。◆双用犁との対比で左反転固定型を単用犁と呼ぶ。ただし高知県は右反転固定型。
			双用犁		◆長野県の松山源造がレバーで反転方向を左右自由に切り換えるように工夫したもので1902年に特許取得、のち各地のメーカーも製造。◆左反転固定の単用犁に対して双用犁と呼ぶ。◆江戸時代以前から左反転の在来犁が広く定着していた西日本ではあまり広まらず、犁耕処女地の多かった東日本では広く普及した。
			二段耕犁		◆1930年に福岡県の深見製造所が開発したもので、前方に付けた小型の副犁で浅く耕したあと本犁で耕すので、楽に深耕ができ、稲株や雑草もよく土に埋まる効果があった。◆重量の重いのが欠点。
	洋式プラウ		◆明治の北海道開拓に導入された洋式プラウを日本向けに小型化したもので、右反転で双柄が特長。北海道・東北地方でよく使われた。		
	人 力 犁	人引き犁 (夫婦犁)		◆山梨県では夫婦犁(めおとすき)とも呼ばれるもので、妻や子に引かせて夫が犁をもって肩で押しながら耕すもの。肩押しのため犁柄が高く伸びる。◆7世紀後半の百済・高句麗難民が牛馬が手に入らない状況で工夫したのが始まり。◆富山県氷見市のヒソマのように近代に生まれたものもある。	
		後退引き犁 (源五兵衛犁)		◆『農具便利論』(1822)の「源五兵衛犁」が初見で、麦の畝間を後退しながら引き、畝に土寄せした。◆江戸時代になって初めて日本人の発明農具が現れる。千歯扱きも万石通しも職人の発明だが、源五兵衛犁は農民の発明の嚆矢であろう。◆南関東には鋤物先を付けた鋤を後退引きするインガ(引鋤)が使われた。	
二人犁			◆朝鮮系三角枠犁の犁轅と柄を細く長くして、2人が呼吸を合わせて鋤のように田畑を耕起するもの。中部地方を中心に山間地や氾濫原に分布する。◆人引き犁と同じく、朝鮮半島からの古代難民が牛馬が手に入らない状況で工夫したのが始まりと考えられる。		

図 11 杵搥臼の伝来系譜に沿った分類

朝鮮半島	木搥臼	往復回転 円錐摺り面 放射目 棒駆動	 <p>往復回転 軸受け棧が無い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆棒駆動の立ち作業。</li> <li>◆軸受け棧は無し。</li> <li>◆日本の木搥臼の原型。</li> <li>◆古墳時代に朝鮮系渡来人が日本に持ち込みか。</li> </ul>
		木搥臼	<p>往復回転・放射目 円錐摺り面</p> <p>朝鮮系を改良</p>  <p>軸受け棧 鑿目 円錐摺り面 放射目 往復回転</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆乾燥した初から初殻を外して玄米を取り出す木製の杵搥臼で、2人で対座し左右の縄を交互に引いて摺る。◆摺り面は円錐形で放射目が刻まれ往復回転で摺る。◆朝鮮半島にも円錐摺り面・放射目・往復回転の杵搥臼があることから、日本の木搥臼は朝鮮系渡来人の持ち込みと考えられる。◆朝鮮半島では立ち姿勢で上臼から突き出た棒で往復させて初を摺る。それを座位を好む畿内人が縄引き型に改良したのであろう。上臼のぶれを防ぐ軸受け棧も日本での付加。</li> <li>◆伝来も改良も6世紀ごろか。◆「臼をひく」は縄引き方式の木搥臼から生まれた言葉。</li> </ul>
脱穀・調製具	杵搥臼	全回転木搥臼	<p>混血型</p>  <p>分画目・8分画 平坦摺り面 鑿目</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆数人がやり木を押し引きして全回転させる木製杵搥臼で、東日本では鑿目のものがある。◆鑿目に慣れた木搥臼職人が、新しく伝わった土搥臼や全回転木搥臼を自分の技術に置き替えたもので混血型。</li> <li>◆関東で使われた鑿目全回転臼は、下臼の軸周りを直径20cm、深さ2cmほど掘り回めていることからすれば、鋸目全回転木搥臼が祖先で、関東の職人が加工の簡単な鑿目に変えたものと考えられる。◆回転方法をやり木方式から棹回しに変えたのは、石臼の棹回し方式に倣った東日本の改良。</li> </ul>
		土搥臼	<p>鋸目</p>  <p>分画目・8分画 平坦摺り面</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆松の丸太に鋸で分画目の歯を切った杵搥臼で、やり木で全回転させて摺る。九州地方を中心に分布する。◆中国の明代末の『天工開物』(1637)には、杵搥臼には土髻と木髻があるとするが、この全回転木搥臼は九州中心に分布することから木髻にあたると思われる。◆鋸目を切るため下臼の軸周りを直径20cm、深さ2cmほど掘り回めるのが形態的特徴。</li> </ul>
		粘土詰め・歯板打ち込み	 <p>分画目・8分画 平坦摺り面 遣木を使った全回転</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆籠編みの円筒枠に粘土を詰め、櫂の薄板を縦に打ち込んで、石臼のような平面・分画目の摺り面を作り、数人がやり木で全回転させて摺る。◆中国江南地方の土髻が伝わったもので、16世紀後半には近江で使われ、また寛永元年(1624)頃に土搥臼職人が長崎に来たと伝えられることから、伝来は何度もあったのだろう。◆木搥臼に比べて効率が良く、江戸時代を通じて徐々に土搥臼に置き換えられていった。</li> </ul>
中国江南地方	全回転臼	<p>木髻 鋸目全回転 平坦摺り面 放射目</p> <p>土髻 粘土詰め竹歯 平坦摺り面 放射目</p>  <p>木髻 土髻</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆直径1尺(30cm)の松材に鋸目。◆2千石で摩滅。</li> <li>◆碎米が少なく。◆軍隊の輸送米用。◆力が必要で男性用。</li> <li>◆籠胴に粘土を詰めて竹歯を打ち込む。◆湿った米は碎米になってしまう。◆耐用は2百石。◆女子でも摺れる庶民用。</li> </ul>	

土摺臼が開発され16世紀以降に日本に伝えられた。

木摺臼は円錐摺り面・放射目・往復回転なのに対して、土摺臼は平坦摺り面・分画目・遣木（やりぎ）を使った全回転が特徴となる。

この大枠のなかで図11にしたがって自館の木摺臼の位置づけを試みられたい。

なお木摺臼の回転の様子は先行研究では「半回転」と呼ばれてきたが、半回転とは「半分回って止まる」ことを指すので適切ではない。これは「往復回転」と呼ぶべきだと論文で呼びかけているが、まだ広まっていない。民具名称のみならず部分名称や往復回転のようなキーワードに関しては、先行研究の提起を鵜呑みに継承するのではなく、後継者が継承の度に吟味を加えて不的確な用語は的確なものに呼び換えていく努力が必要であろう。

### 1) 朝鮮系木摺臼の伝来と展開

木摺臼は朝鮮系の立ち作業・棒駆動の往復回転木摺臼が早くから入っていたようで、5世紀後半～6世紀の第2期渡来人の持ち込みであろう。奈良・大阪の畿内中心部では座位作業に慣れた畿内人＝江南地方少数民族系稲作民の後裔たちの好みに合わせて、背を低くして直径は大きくし、棒駆動を縄引き型に変え、上臼のぶれを抑えるため軸受け棧を付加したタイプが開発され畿内の標準となったようだ。

大化改新政府が打ち出した班田収授制は戸籍に登録された男女に一律に水田を班給するものだが、7世紀後半の日本列島で戸籍に登録された庶民がすべて稲作民であったはずはなく、大化改新政府もそれは承知で田を班給していた。つまり改新政府は稲作民化政策を展開していたのであり、非稲作民に田だけを班給しても稲作はできない。そこで稲作農具一式のモデル配付をおこなったようで、中国系長床犁の配付は証明済みだが、畿内タイプの縄引き型木摺臼も様（実物模型）を配付したと考えられる。福井県では立ち作業・棒駆動の朝鮮系木摺臼に畿内系の軸受け棧が加わった混血型が見つかり、大化改新政府による畿内型縄引き型木摺臼の様配付が実際におこなわれたことの痕跡と考えられる。

江戸時代に木摺臼から土摺臼への乗り換えが進行したので、関東地方に木摺臼はほとんど残っていないが、関東地方にも渡来人が来ていたので、福井県で見つかった立ち作業・棒駆動の朝鮮系木摺臼に畿内系の軸受け棧が加わった混血型が関東地方にもあった可能性は十分にある。これが対蝦夷戦争の柵戸の入植で東北地方に持ち込まれたとするなら、岩手県の2本把手型木摺臼がすっきり説明できる。この2本把手型木摺臼が青森県に伝播して4本把手型となったのであろう。

### 2) 中国系土摺臼の伝来と展開

渡来人による朝鮮系木摺臼の持ち込みから約千年後、中国江南地方から土磬＝土摺臼が伝わった。伝来は16世紀から17世紀にかけて何波かあったと考えられる。土摺臼が木摺臼に比べて碎米は出やすいとされながらも効率は良かったと

され、江戸時代に時間をかけて木摺臼から土摺臼へ交代が進んだというのが一般的傾向である。

『天工開物』では中国には土磬・木磬の2種の木摺臼があったとされ、土磬は土摺臼だが木磬も日本に伝わっていたようで、九州に分布する鋸目全回転臼は木磬の後裔と見られる。

## 8. 千石通し・万石通し

千石通しと万石通しの違いについては、かつては『国史大辞典』（1987）は千石通しは「木摺り後の玄米と粃とを選別する日本特有の穀物選別用具」とする。『広辞苑』（第五版、1998）は千石通しは「傾斜した篋の上端から搗米を流下させ、糠をふるい落して米だけを選り分ける。穀粒の選別にも使用」とし、万石通しは「千斛篋の改良型で、二～三枚の篋から成る」とする。『日本民具辞典』（1997）は千石通しは「主として精米に用いた選別用具の一種。機能・構造ともに万石通しとかわらない。（中略）精白中の糠や屑米を、斜めに固定した網枠の上を滑落させて分離する」とし、万石通しは「米の選別用具。千石卸・万石卸ともいう。機能・構造ともに千石通と同じである。一度に処理できる量が多いことから万石通の名が起こったとされるが、実際の処理量に差がなく、商品としての販売効果を求めた命名であったと考えられる」とする。『日本民俗大辞典』上（1999）は千石通しは「木摺りの後、唐箕で選別した玄米を、さらに網目を通して精選する日本独特の農具。（中略）万石どおしと称する地域もあり、その区別については、万石は千石の改造型、また大型と小型との違いともいうが明確ではない」とするなど、混乱を極めていた。

そこで「千石通しの成立と伝播」（一）（二）（『民具マンスリー』38-7、38-8、2005）、「万石通しの発明と伝播」（一）（二）（『民具マンスリー』39-6、39-8、2006）、「高校教科書にみる千石通し・万石通し」（『民具マンスリー』41-7、2008）であらゆる資料を掻き集めて検討した結果、ようやく全貌がつかめた。図12はその成果をまとめたもので、結論だけを示そう。

- ①貞享元年（1684）に江戸大門通りの釘屋喜兵衛が、取扱い商品の金網を使って千石通しを発明、ヒットした。斜め網枠を使って自動選別をするという画期的発明である。
- ②『和漢三才図会』は舂き米を入れると白米と糠に選別されると説明しているので、千石通しは農具ではなく台所用具だった。
- ③千石通しはすぐ大坂に伝わりコピー商品が作られた。
- ④貞享元年か翌年、千石通しにヒントを得たおそらく農具商が斜め網枠に漏斗を載せた万石通しを発明、これもヒットした。これは木摺臼にかけ、唐箕の一番口に出てきた玄米と摺れ残りの粃を選別するもので、これは農具で、斜め網枠の上端に軸固定の後脚をつけた可動脚型である。
- ⑤万石通しも直後に大坂に伝わりコピー商品が作られた。大坂では固定脚型が発明されて加わった。

図 12 千石通し・万石通し・五百石通し

分類		出現年	出現順	図 像	解 説
台所用具 米・糠の選別	千石通し	貞享元年、江戸	1		<p>◆永らく農具とされてきたが、米を搗いたあと白米と糠を選別するものなので、台所用具。◆傾斜網杵を使った自動選別器で、篩のように毎回揺すって捨てる手間を省いた画期的発明◆江戸大門通りの釘屋喜兵衛が貞享元年(1684)に開発。喜兵衛は蒸籠をベースに工夫したようで、江戸製には機能に無関係な段組構造が残る。◆毎日多くの飯を炊く大名屋敷や下町の大店向き。酒造業・精米業などでも使われた。◆民具例はきわめて少なく、10指に満たない。◆発売まもなく大坂に伝わりコピー製作。</p>
	五百石通し	江戸後期、江戸	4		<p>◆千石通しを一般家庭向きに小型化したもの。「五百石通し」はコンパクトさが売り物の命名。◆形態からすれば、千石通しではなく農具の万石通しをヒントにしたものか。◆東京都の江戸周辺と千葉県に分布するが他県では見られないローカルな民具。◆開発は近世後期の江戸か。</p>
農具(脱穀・調製具)	万石通し	貞享元〜二年、江戸	2		<p>◆千石通しをヒントに江戸で開発された農具で、唐箕の一番口から出てきた玄米の中から摺れ残りの粉を選別する道具。全国に広まったヒット商品。◆後脚を可動式にして傾斜網杵の角度を変えて選別の調整をするしくみ。◆「万石通し」という名称は、千石通しの後に出現したことを物語る。◆千石通し発売直後の貞享元年か2年に江戸の農具商が開発か。◆大坂では万石通しを千石通しと呼ぶ名称混乱が起きた。</p>
		貞享二〜三年、大坂	3		<p>◆江戸発の可動脚型万石通しをヒントに大坂で開発されたもので、可動脚型では床に落ちていた玄米を排出板で受けて側面か背面に出すもの。◆可動脚型とともに西日本の大坂流通圏に広まり、各地で様々なバラエティーを生み出した。◆古い紀年銘には農人橋京屋とあることから近世大坂の農具メーカー京屋の開発か。</p>

⑥大坂では千石通しと万石通しがほぼ同時に伝わったこと、大坂の『和漢三才図会』が「農具類」に「千斛筵」を載せていたため、千石通し＝農具の誤解が江戸時代から広まった。

⑦農学の大御所、古島敏雄が農具の万石通しを千石通しと記述したため、千石通し＝農具の誤解が学界に広まり定着した。

以上が混乱の広がった経緯である。この事実を踏まえて今後については、

千石通し＝白米と糠を選別 → 台所用具

万石通し＝玄米と粉を選別 → 農具

と呼び分ければいだろう。

民具の系統樹の話でいえば、民具の系統樹の林の千石通し・万石通しの樹については、2005～2006年の調査でほぼ進化の筋道解読が終わったので、すっきりした形で説明することができるようになった。民具の系統樹の林のそれぞれの樹についての進化の筋道解読が今後の課題である。

## 9. 鞍

### 1) 日本の鞍の歴史的展開

鞍の研究はかつては、有職故実の貴族・武士の乗馬鞍の記述だけで農耕鞍の研究は皆無の状況だった。

図 13 は農耕鞍も含めた鞍全体を概観したもので、馬が導入された古墳時代には、朝鮮半島から乗馬鞍と荷鞍も伝わったと推測され、日本の荷鞍は形状も構造も朝鮮半島の荷鞍の遺伝子を受け継いでいる。

5世紀に馬鍬が伝わると、荷鞍に引綱を付けて馬鍬を引かせたと考えられる。荷物を載せないで鞍は小型で間に合うので小振りな農耕鞍に進化した。

乗馬鞍は古墳時代は朝鮮半島系の後輪直立型だったが、遣唐使を通して遊牧民族系の唐鞍からくらを導入してからは、唐鞍と古墳時代鞍の混血型で和鞍やまとくらが平安時代に成立、江戸時代まで継承された。

図 13 鞍の種別

乗馬鞍		荷鞍	牽引鞍	
貴族・武士の和鞍(やまとぐら)	近代陸軍の軍用乗馬鞍		農耕鞍	馬車引き鞍
<ul style="list-style-type: none"> <li>◆平安～江戸時代</li> <li>◆柄組・革紐綴じの堅牢な作り</li> <li>◆漆塗・螺鈿の工芸品</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆明治～昭和期</li> <li>◆前輪がない</li> <li>◆欧州系・鞣革製</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆渡来人が持ち込んだ大型鞍</li> <li>◆厚さ20cmのクッション</li> <li>◆荷受棒、荷縄鈎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆古代に荷鞍から分化</li> <li>◆双橋鞍・単橋鞍・独橋鞍</li> <li>◆胴引き法用は中型</li> <li>◆首引き胴引き法用は小型</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆農耕鞍を改良</li> <li>◆大正・昭和期に発達</li> <li>◆轆棒受けの鉄製フックつき</li> </ul>

明治の陸軍はヨーロッパの革製乗馬鞍を軍用に導入した。明治・大正時代になって馬車・牛車が荷物運送の主役を担うようになると、農耕鞍の転用で轆棒受けの鉄製鈎を付けた馬車引き鞍が現れた。

## 2) 鞍の形態分類

図 14 は、鞍の構造に基づいた形態分類である。鞍の基本型は牛馬の背中をまたぐ橋（アーチ）が前後に2つあるもので、これを「双橋鞍」と呼ぼう。それに対して馬の背中をまたぐ橋が前杵だけで、後杵は上部が開いて橋にならないものを「単橋鞍」と呼ぶことにしよう。さらに前杵と横木だけで後杵は何もないものを「独橋鞍」と呼ぼう。一方牛馬の背中をまたぐ橋に関しては曲がった自然木を使った一木造りのものを「山杵」、2本の角材をX字形にクロスさせたものを神社の屋根の千木のイメージから「千木杵」と呼ぼう。

この2つの要素の組み合わせで山杵双橋鞍、千木杵単橋鞍など呼び分けができる。この分類は便利なので、広まっているようだ。

## 3) 単橋鞍の形成過程

鞍は世界的に双橋鞍が標準で、人が家畜の背に置く杵の安定的な形を考えると双橋鞍になるのであろう。それに対して単橋鞍・独橋鞍は日本独自の変わったタイプである。図 15 は、その特異な単橋鞍・独橋鞍の発生過程をシミュレーションしたものである。

中国には引綱が首木の稜線を辿って頂部で左右の引綱が繋がるという特異な「引綱渡し首木」がある。遣唐使を通して唐の長床犁とともにこの引綱渡し首木も導入されたと考えられ、それも様=実物模型として中国系の政府モデル犁とセットで各地の評督（のちの郡司）に配付され普及が図られたようだ。首木と単橋鞍の分布からはそう推定される。

7世紀後半では馬鞍は全国的に普及していて、人々は馬の背に双橋鞍タイプの農耕鞍を据えて馬鞍を引かせていた。この馬の鞍引きに慣れた人々はいくつかの地域で引綱渡し首木を見て鞍と勘違いして牛馬の背に据えた。1本アーチの首木を背に据えて犁や馬鞍を引かせると首木は後ろにずれるが、腹帯は牛馬の胸の辺り肋骨の上に掛かっているため強く締められない。そこで首木の左右から滑り止めの横木を後方に突き出させた。牛馬の体型を真上から見ると腹の部分が幅が広がるので、横木を後ろに向かってハの字形に付ければ、横木は牛体・馬体をしっかりキャッチして首木=鞍の後方ずれは止まった。独橋鞍の誕生である。時期は7世紀後半の662～3年頃で、このまま20世紀まで継承してきたのが熊本県旧矢部町付近の独橋鞍と考えられる。

ところが独橋鞍で満足しない人々が多くいた。遊牧民と違って家畜頭数の少ない日本では牛馬を家族の一員のように可愛がる。この人々にとっては後方に突き出した横木が牛体・馬体を傷つけないか心配で牛体・馬体保護のための角材を取り付けたのが単橋鞍で、これでやっと安心した人々が多くいた。九州全域と鳥取県域である。九州の単橋鞍は横木は左右各1本なのに対して、鳥取県域の単橋鞍は横木は左右各2本でタイプは異なる。これは引綱渡し首木から単橋鞍への進化が九州地方と鳥取県域という大きく離れた地域で相互に没交渉で同時並行的に起きていたことになる。

ここから次の事実が引き出せる。

- ①政府モデル犁と引綱渡し首木の様配付には首木の使い方についての親切な説明もなく、ただこれを使えと実物模型が下付されただけだったので、引綱渡し首木を新型鞍と思ひ込む勘違いは九州地方と鳥取県域で起こっていたこと、
- ②手慣れた馬鞍用双橋鞍は使わないで、政府モデル犁の引綱渡し首木=彼らにとっては新型鞍をとにかく使ってみようという人々が西日本には多くいたこと、

③その態度には政府からの圧力と同時に新しいものは試してみたいという進取の気風も読み取れること、  
 ④後方に突き出た横木を見て「牛馬が痛そう、可哀そう」と感じる人々が新型鞍に挑戦した地域の全域に多くいて、その結果、大部分の地域が単橋鞍で落ち着いたこと、これらの物語が単橋鞍・独橋鞍という特異な形態の鞍の形と分布のあり方に遺伝子レベルの圧縮情報として保存されてきたのである。

4) 民具遺伝子の全解読が目標

いまここでおこなってきたのは、民具系統樹の林のなかの「鞍の樹」の遺伝情報の読み出しであり、ゲノム解読を通しての進化過程の復原である。科学の世界ではヒトの遺伝子の全解読を目指すヒトゲノム計画が立てられコンピュータを駆使して取り組んだ結果、2003年に全解読に成功した。このヒトの遺伝子全解読は治療不可能とされてきた遺伝子系難病の治療にも光明をもたらしている。

民具では河野が30余年かかって解読できたのは以上に尽きるが、民具系統樹の林の個々の樹のゲノム解読は地道ながら努力が続けられている。高橋典子氏の企画展の取り組みのなかで灯火具の遺伝子解読が進んだ。また神野善治氏は小さな樹だが灌漑水の平等な配分に使われた香時計の遺伝子解読をほぼ終えた。その結果、灯火具や香時計については、自館の資料を高橋、神野氏の研究成果と付き合わせれば、その歴史的背景、ひいてはわが市町村の歴史の一齣が蘇るようになった。

民具系統樹の林のすべての樹のゲノム解読が終われば、各市町村それぞれの個性に満ちた縄文・弥生・古代・中世・近世・近代史が蘇り、地域の個性とは何か、われわれはどこから来たのかという地域起こしの核の部分に科学的根拠を与える情報を地域に還元することができ、民具を寄贈した地域住民の付託に応えられることになる。目標はそこにある。

10. 馬の制御具の分類

銜・轡・面懸を含む馬の制御具は私の専門ではないが、近年、小島摩文氏によって優れた分類構想が示されたので紹介しておきたい。また下野敏見氏によって大きな構想のオモゲー研究が提起された分野でもある。その継承のあり方も含めて取り上げることにした。

1) 下野敏見のオモゲー研究

南西諸島の馬の制御具オモゲーは、下野敏見氏の紹介で民具研究界ではよく知られる民具となった。下野は増田精一の「考古学からみた東亜の馬具の発達」と林田重幸の「日本在来馬の源流」の成果を取り入れて、日本の馬と馬の制御具には二つの層位があると理解し、

オモゲー……小形馬、南アジア的、縄文後晩期・弥生的、非金属文化的、農耕的

図14 鞍の形態分類









		鞍の構造			
		双橋鞍	単橋鞍	独橋鞍	近代独橋鞍
山樵の形	山樵	 山樵双橋鞍	 山樵単橋鞍	 山樵独橋鞍	
	千木樵	 千木樵双橋鞍	 千木樵単橋鞍	 千木樵独橋鞍	
起源		荷鞍を小型化	引綱渡し首木を間違っ て背中に置いたことから進化		ハモがヒントか

図15 単橋鞍の発生

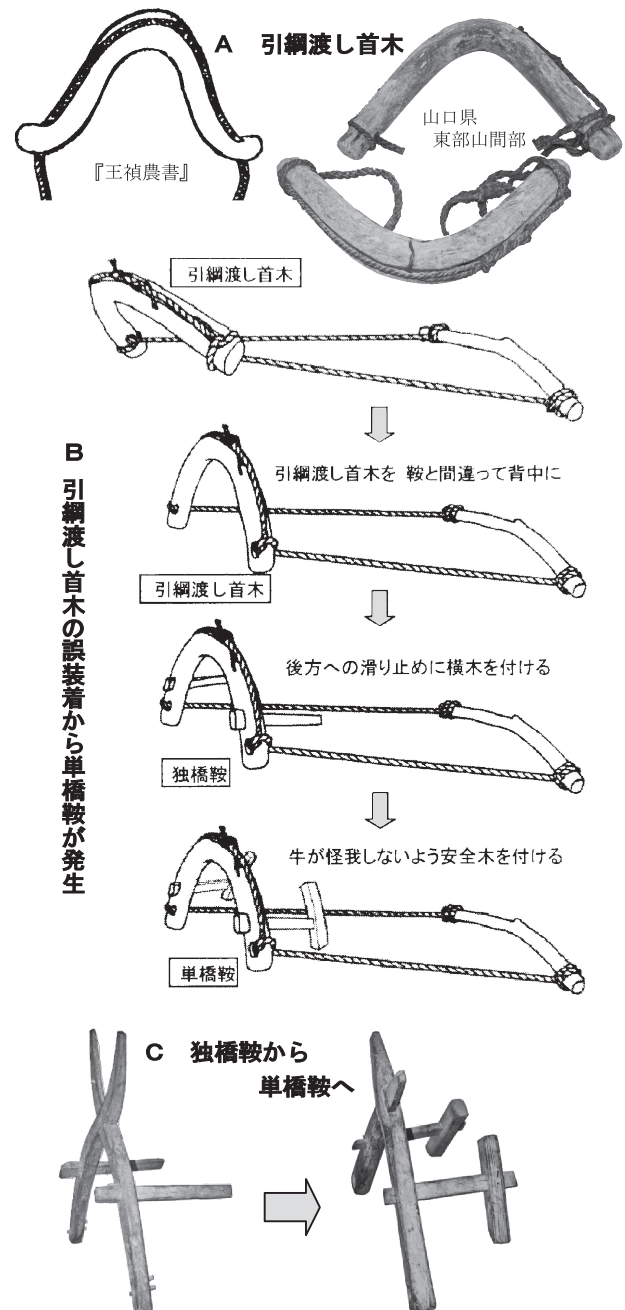
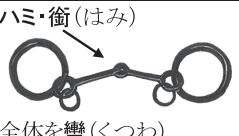
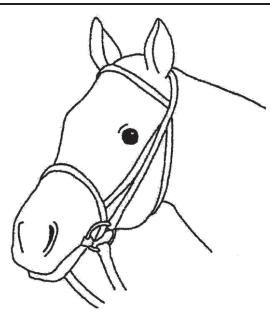
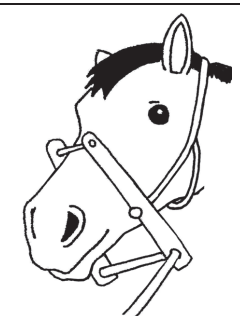
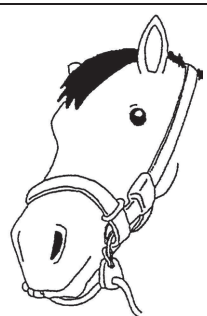
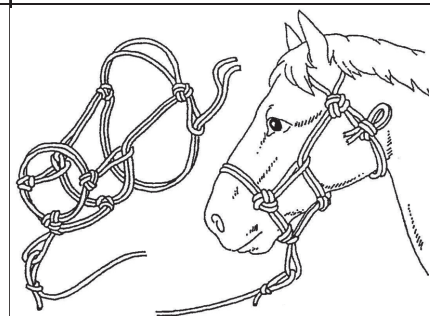


図 16 銜と頭絡

馬の制御具			
銜を用いる制御具	銜を用いない制御具		
銜(はみ)	締頭絡		縄頭絡 (「無口頭絡」の呼び換え 河野)
	棒締頭絡	帯締頭絡	
 <p>ハミ・銜(はみ) 全体を轡(くつわ)</p>	<p>ヒョウシ(北海道) イタオモテ(薩摩・大隅) オモゲー(トカラ列島) ウムウェー(喜界島) ウムグウェー(奄美大島)</p>	<p>シメーダテ・ メーダテ(対馬)</p>	<p>面懸(おもがい) オモヅラ 無口頭絡・無口・ムクチ 寝張頭絡(ねばりとうらく)・寝張</p>
			
<b>2 本手綱</b>	<b>1 本手綱</b>		
後ろから手綱で制御	人が手綱を握って先導		

小島摩文「薩摩の馬文化」(2002)をもとに一覧表に再構成。銜の図像の追加など、図は一部加筆

クツワ………中大型馬、北アジア的、弥生期・古墳期的、金属文化的、軍事的という壮大な構想を立てた。先にも触れたように日本の民具研究界でも農業技術史界でも日本の民具・農具は日本国内で発生・進化してきたと漠然と考えられていた時代であり、民具研究者間では民具学の研究対象は自製民具に限るべきだ、いや流通民具も含むべきだともっぱら内向きに議論されていた時期である。このなかで下野の構想が民具研究界に大きな夢を与えた役割は研究史上に輝いている。

このオモゲーが南西諸島と北海道に分布する事実から、周囲論での説明が試みられた。木製のオモゲーが先に伝来して日本全体に分布を広げたあとに、政権中心部に轡=ハミと中大型馬が伝来した結果、オモゲーは金属製のハミによって駆逐され、古層のオモゲーは周縁部の南西諸島と北海道に残ったという考えである。壮大で魅力的な構想だが、小島によってそうした事実はなかったことが論証され、たしかに関西の民具調査でも考古資料からもオモゲーの痕跡は見つかっていない。ただ下野の構想の大きさは継承したいものである。

## 2) 小島摩文の馬の制御具の新分類

小島は、オモゲーの類を棒締頭絡と呼び換えたうえで、これまでの研究は棒締頭絡について、頭絡全体の分類のなかでの位置づけがなされないままに、各研究者が自説の展開の都合のいいように恣意的に利用され解釈されてきたことに問題があったと認識し、その反省に立って、馬の制御具全体の分類を試みた(「薩摩の馬文化」2002、「棒締頭絡の語られ方」2005)。小島は文章と挿絵と系統図で議論を展開したが、そ

の小島構想を本書で使ってきた階層構造を含む一覧表にまとめ直したのが図 16 である。

このうち「締頭絡」「帯締頭絡」「棒締頭絡」は小島の造語のようで、新たな分類に対する意気込みが感じられる。この分類で馬の制御具の歴史的研究のための基本骨格ができあがった。本書で繰り返している民具の系統樹の林の話でいえば、馬の制御具の樹の幹と主な枝の付き具合が復原されたことになる。ハミと棒締頭絡の歴史展開は複雑なようで、まだまだ資料不足の状況だが、小島分類が提示されたことで、新資料の系統樹への位置づけが容易にできるようになった。この学史的意義は大きい。

## 3) 無口頭絡は縄頭絡に

そこで一つ注文がある。図 16 の右欄の「無口頭絡」は学界用語だが、意味の通らない言葉である。無口頭絡を装着したとたん、魔法のように馬の口が消えて無くなる……そんなことはありえないだろう。図からして銜を使わない縄だけの頭絡を指しているのは誰の目にも明らかなので、素直に「縄頭絡」でいいのではないか。

当初は無口頭絡では分りにくいので、銜のない頭絡という意味で「無銜頭絡」を考えたが、「銜」の音読みが「カン」であることはあまり知られておらず無銜頭絡(ムカントウラク)と読める人は少ないであろうし、ムカントウラクではイメージは湧かない。その点「縄頭絡」なら誰でも読めるしイメージもピッタリである。小島氏は近々これまでの研究を本にまとめられる計画とのこと。その機会にぜひ縄頭絡に差し換えられることをお勧めしたい。



小島論文を読む限りでは、棒締頭絡の研究は世界的に低調で、今回の小島分類が書物で出版されるなら、その分類は欧米の研究者の注目するところとなって翻訳されるであろう。翻訳者は「無口頭絡」は訳しようがないので、無口頭絡の図を見ながら「縄頭絡」の英語版に意識するであろう。英語化されるとそれが世界標準になるが、「縄頭絡」の意識を含んでいる以上、その手柄は翻訳者に持って行かれてしまう。時代の流れ時間の流れは年々早くなってきているので、10年以内にこんな事態は起きるであろう。そのことを見通して、今から縄頭絡にして、「締頭絡」「帯締頭絡」「棒締頭絡」「銜」はこのままで大丈夫なので、完成型の分類表を著書に載せて世界に発信されることをお勧めしたい。

日本人研究者の民具分類が世界標準になることは、オリンピックで金メダルを取るのと同価値で日本人にとって誇りであり、若手研究者に夢を与えて研究界を活性化させることになる。小島分類が世界標準になる、ワクワクする話ではないか。

## 11. 武器としての鉞

斧は私の専門分野ではないが、マサカリとは何物か、以前から気に掛かっていた。鉞は武器だったといわれるが今一つイメージが鮮明でなく、これは私にとどまらず多くの民具研究者もそうだろうと予想できたこと。それにハツリヨキの一部がマサカリと呼ばれる例が時々あり、それが転用に起因するのかただ形が似ているからそう呼んだだけなのか気に掛かっていた。一覧表執筆後に『太平記』の鉞を使う場面を読んだところ武器としての鉞がリアルに描かれていて、これはこの機会に紹介して学界の共有財産にしたいと思ったことと、この資料の分析を進めるなかで、鉞とハツリヨキの関係についても見通しが明らかになってきたので、これは伝えておきたいと思ったのである。

『日本国語大辞典』はまさかり(鉞)の項目で「木を伐るのに用いる大形の斧(おの)。中古には兵器にも用いた」と説明し、『日本書紀』継体天皇21年(527)には筑紫君磐井の反乱を鎮圧するため、天皇が物部麁鹿火に斧鉞(まさかり)を授けて筑紫以西の軍事指揮権・行政権を全面委任したと記す。ただし現実に鉞を権限委譲の象徴として手渡したかどうかは定かではない。史書の信頼度が増す奈良時代以降では、天皇は遣唐使や征討将軍に全権委任の印として授けるのは節刀と呼ばれた刀であることからすれば、継体紀の鉞授与の記事は中国の史書からの借用表現である可能性が高い。

### 1) 鉞を使った戦闘場面

確実な武器使用の例として『日本国語大辞典』は『太平記』の戦闘場面をあげている。民具・民俗研究者が『太平記』の本文を読む機会はほとんど無いと思われるので、少し長いとその部分を引用しておこう。なお『太平記』は漢字カタカナ交じり文で現代人には読みづらいので、漢字ひらがな交じり文に改めた小学館『新編日本古典文学全集』から引用

した。

鉞が出てくるのは『太平記』31巻「赤松氏範と土岐長山と勇力の事」の項である。南北朝内乱期の文和2年(1353)、吉野に拠点をもつ南朝方(天皇方)が京都に攻め上って足利方と闘った。6月9日の合戦では赤松・楠ら天皇方が戦いを優位に進め、落ち行く足利方に追い打ちをかけている状況下で、天皇方の赤松氏範が落ち行く足利方の土岐長山を呼び止めて闘う場面である。

赤松弾正少弼氏範は、何も打込の軍をば好まず、手勢ばかり五十余騎引き勝つて、返す敵を追つ立て追つ立て責めけるが、哀れ吉からんずる敵に合はばやと願ひつつ、北白川を今道へ向つて歩ませ行くところに、洗革の鎧の妻取つたるに、竜首の甲の緒をしめ、五尺ばかりなる太刀二振佩いて、齒の巨八寸ばかりに見えたる大鉞、柄を手元長く取り延べて、近づく敵あらばただ一打に擲ちひしがんと、尻目に敵を睨みて閑かに落ち行く武者あり。氏範遙かにこれを見て、哀れこれは音に聞ゆる長山遠江ごぞんめれ、組んで討たばやと思ひければ、諸鎧を并せて跡に追ひ付き、「あの洗革の鎧は長山殿とみるは僻目か。正なうも敵に後を見する物かな」と詞を懸けられ、長山からからと打ち笑ひ、「問ふは誰ぞよう」「赤松弾正少弼氏範よ」「さては敵は吉き敵、ただ一打に失はんこそかはゆけれ。西に向つて念仏申せ」とて、件の鉞を持つて開いて、甲の鉢を破れよ砕けよと打ちけるところを、氏範太刀を平めて打ち背け、鉞の柄を左の小脇に挟み、片手にてえいやとぞ引きたりける。引かれて二疋の馬隘近に成りければ、互ひに太刀にては切り得ず、蛭巻したる櫃の木の柄を中よりふっとねぢ切つて、手元は長山が手に残り、鉞は氏範が左の手にぞ留まりける。長山、今までは我に増りたる大力非じと思ひけるが、氏範に勢力を碎かれて、叶はじとや思ひけん、馬を早めて落ち延びぬ。氏範大いに牙を嚙みて、「詮なき力態故に、組んで討つべかりつる長山を討ち漏らしつる事の妬さよ。能々敵は何れも同じ事、一人も亡はずに如かじ」とて、ねぢ切つて取つたる鉞にて、逃げる敵を追つ攻め追つ攻め切りけるに、甲の鉢を真額まで破りつけられずと云ふ者なし。されば、流るる血には斧の柄も朽つるばかりに成りにけり。

『新編日本古典文学全集 57 太平記④』

小学館、1998、29-31頁

天皇方の赤松氏範は名のある敵武者を求めて追撃中に立派な装備から足利方の土岐長山を見つけて挑んだ。この土岐長山は馬上で大鉞を掲げていたが、その描写が、

齒の巨八寸ばかりに見えたる大鉞、柄を手元長く取り延べて、近づく敵あらばただ一打に擲ちひしがんと、尻目に敵を睨みて

とあって、刃渡り24cmほどの大鉞を「柄を手元長く取り延べて」つまり柄の刃の近くの部分を握って残りの柄を後方に長く伸ばしていた、すなわち柄が自然に水平になるよう鉞

の重心位置を握っていたことになり、移動中にもっとも危険が少なく手が疲れない合理的な持ち方であり信頼度の高い描写である。

さて追いつがった赤松に対して土岐長山は、

「さては敵は吉き敵、ただ一打に失はんこそかはゆけれ。西に向つて念仏申せ」とて、件の鉞を持つて開いて、甲の鉢を破れよ砕けよと打ちける

「ああい敵に出会えたものだ。ただ鉞の一打で命を落とされるのは気の毒なことだ。西に向かつて念仏を称えられよ」と言っていることからして、土岐長山は馬を返して自信満々で攻撃をしかけてきたのである。そして「その鉞を振りかぶって兜の鉢を割れよ砕けよとばかりに」、つまりヘルメットの頂部を狙って鉞を振り下ろしたが、赤松は「太刀を平めて打ち背け、鉞の柄を左の小脇に挟み、片手にてえいやとぞ引きたりける」という。「太刀を平めて打ち背け」という表現からして刀を鉞の柄に斜めに当てて鉞を滑らせ、振り下ろされた状態の鉞を左の腋に抱え込んで締め、鉞ごと奪い取ろうとしたようだ。そこで両者は、

鉞を奪はん、奪はれじとねぢ合ひける程に、蛭巻したる櫃の木を柄を中よりふっとねぢ切つて、手元は長山が手に残り、鉞は氏範が左の手にぞ留まりける。

というのだが、鉞の櫓の柄は容易に捻り切れるものではない。両者は本当に鉞の柄を捻り切ったのか。

## 2) 捻り切れなかった鉞の柄

鉞の櫓の柄を捻り切るには手ぬぐいを絞るように赤松と長山が握った部分を互いに反対方向に回転させなければならないが、赤松は鉞を左の腋に抱え込んで固定しているので捻っておらず、長山だけが捻ることになる。ところが柄は直径が小さいので手で握って回転させようとしても大きなトルクは掛けられず捻り切ることは元々無理なのである。『太平記』は語り物であり、聴き手の歓心を買うため見せ場では表現は大げさになりやすい。これはそのケースであろう。

また一步譲って柄が途中で折れたことの誇張表現ではないかという考えに対しても、これも無理である。柄を折るためには柄をへの字に曲げなければならないが、鉞の大部分は赤松の腋に挟まれて固定されているので、長山が伸ばした片手だけで柄をへの字に曲げて折らなければならないと、それは手首の回転力、テニスやゴルフというスナップだけで櫓の木製の柄を折ろうとするもので、これはいかな大男・大力でも不可能であろう。ここはやはり語り物特有の誇張表現としておくのが無理がない。

## 3) 鉞を腋に挟んだ赤松の勝ち

この鉞の争奪戦、『太平記』は「鉞を奪はん、奪はれじとねぢ合ひける程に」と両者互角の綱引き状況と描いているが、じつはこの勝負、赤松が鉞を左の腋に抱え込んで締めた段階で勝敗は決まっていた。その辺りを分析してみよう。

氏範太刀を平めて打ち背け、鉞の柄を左の小脇に挟み、

片手にてえいやとぞ引きたりける。

という場面だが、

①「氏範(中略)鉞の柄を左の小脇に挟み」とあり、赤松は鉞の刃を体の後ろに出した形で柄を腋に挟み込んだ。このまま鉞を渡すまいと無意識に腋を締めたであろう。鉞の重心位置=柄の刃に近い部分を左の腋に抱え込んで確保したので、鉞は赤松の体と一体化し、長山の握っている柄尻は赤松の体重・鎧の重さ合わせて最低でも80kgの質量の塊の突起部分になってしまった。長山が鉞を奪うには鉞と赤松の体の一体化を解除しなければならないが、馬上で片手を伸ばした状況ではそれは無理である。

②赤松が鉞を腋に抱え込んで締めた状態では刃渡り24cmほどの大鉞の刃は赤松の腋から後方に突き出した状態になっている。これを長山が柄尻を握って引き抜こうとすると大鉞の刃は釘の頭のように抵抗材となって狭い腋を抜けれない構造になっている。この状態で馬上の長山が柄尻を握って引き抜こうとしても所詮は無理なのである。

③「鉞の柄を左の小脇に挟み、片手にてえいやとぞ引きたりける」とあるが、右手は太刀を握ったままなので、この片手は左手であり、左手は手綱を握ったままの上、腋を締めているので手の自由度は落ちて、左手で鉞の柄を引くことはできない。この状態で鉞を長山から奪おうとするなら、赤松は左手で柄を握ったまま本能的に体を左に捻って回転させ、柄尻を長山から遠ざけようとするであろう。80kgの慣性力を伴った大きな力で柄尻は離れていくので、長山は握った手が伸びてバランスを崩しそうになり、このまま握っていると長山は落馬することになる。馬上の一騎打ちで落馬は致命傷、鎧の重さ丸ごと地面に叩きつけられ、一瞬茫然としたその瞬間、相手は鎧の重さ丸ごと落下してきて馬乗りになって押さえつけ、鎧の綴をはね上げて小刀で頸動脈を切るからである。落馬の危険を悟った長山は自ら手を放して鉞をあきらめ、馬を返してこの場から脱走したのである。

一見どうでもいいようなことに枚数と手間をかけて分析したが、一般にはこの場面は本文を表面的に読んで赤松と長山の鉞の柄を握っての綱引き場面と受け取られているようで、『新編日本古典文学全集』の挿絵に掲げられた寛文年間の絵入り太平記の挿絵も2人の騎馬武者が鉞の柄の両端を引き合っている様子が描かれている。ここでは赤松が鉞を左の腋に挟んだという重要な記述がすっぽりと抜けて間違っただイメージが流布され一人歩きしているので、枚数はかかったが詳しく分析しておいた。

## 4) 兜の鉢を叩き割る鉞の威力

長山を取り逃がした赤松のその後の行動を『新編日本古典文学全集』本の現代語訳で掲げると、

氏範は歯がみをして大いにくやしがり、「つまらない力

競べをしたために、組み合っけて討ち取ることでできた長山を討ち漏してしまった恨めしさよ。まあよいわ、敵は誰でも同じこと、一人でも多く殺すほうがよい」と、長山からねじ切って奪った鉞でもって、逃げる敵を追い込み追いつめて斬りつけたので、兜の鉢を額の真ん中まで割り裂かれない者はいなかった。そのために、流れる血で鉞の柄も腐ってしまうほどになったのである。

という凄惨な場面が展開していた。

ところで赤松が効果的に兜の鉢を割り続けていることからすれば、柄はやはり捻り切られていなかったようである。柄が短くなると大きく振りかぶることができず、落下の加速度も小さくなって衝撃力は弱まり、兜に当たっても鉢を一撃で割ることはできなくなる。赤松と長山が鉞を力任せに奪い合っけて柄を捻り切ったというのは語り物特有の見せ場の誇張表現だったことが、ここでも証明できたことになる。

ここで『太平記』に見られた武器としての鉞の特徴を列挙してみると、

- ①「鉞を持つて開いて、甲の鉢を破れよ砕けよと打ちける」「逃げる敵を追つ攻め追つ攻め切りけるに、甲の鉢を真額まで破りつけられずと云ふ者なし」という表現からして、鉞は兜の鉢割り専門の武器だったようだ。兜の鉄鉢は矢や刀から頭を守るには有効で、武士たちは安心して戦場に赴けた。ところが兜の鉢めがけて振り下ろされる鉞は額までまっ二つに割ってしまうので、武士たちにとっては恐怖の新兵器だったのであろう。
- ②鉞は長山のように「我に増りたる大力非じと思ひける」武士が馬上で使う武器で、片手は手綱を離せないで、もう一方の手で振り上げ振り下ろして兜の鉢を叩き割っているものであり、力自慢専用の武器であった。
- ③力自慢専用といっても、誰でも使う武器ではなかったようだ。赤松は長山が「氏範に勢力を碎かれて、叶はじとや思ひけん、馬を早めて落ち延びぬ」と自分に勝る大力と認めおろ、赤松自身も奪った鉞で何人もの兜の鉢を割っていることからすれば、客観的にも大力だったが、赤松自らは鉞を普段使っていなかったものであり、鉞は大力でも使うとは限らないというマイナーな武器であった。

#### 5) 鉞が普及しなかったのは筋力の限界か

ヨーロッパの中世では斧が武器として使われていたが日本ではごく少数の者が使う武器にとどまっていた。なぜか。これはヨーロッパ人と日本人の筋力の差に関係がありそうである。ローマの兵士は片手に幅広の重そうな剣、もう一方に楯を持って闘っていた。片手で力任せに剣を振り下ろして相手を倒していたのである。他方、日本の太刀は両手で握って相手を切る。日本人は両手を使わなければ人は切れなかったのである。これはヨーロッパ人に比べて筋力が弱かったからであろう。サッカーで日本のチームが決定力不足というのも、このことに関係がありそうで、鉞が一部の力自慢の武士の武器にとどまって普及しなかったのは、一般的な日本人の体力

図 17 奥三河の花祭りの神鬼と鉞



では鉞は扱いきれなかったからであろう。

#### 6) 戦国時代後期の集団戦で消滅

鉞が力自慢の武士の武器として存在意義を発揮できたのは、名のある武士同士が互いに名乗りをあげて勝負を挑む一騎打ちの場面である。現代人によく知られた武士の名勝負の多くは『平家物語』に描かれたもので、その後、13世紀後半の元寇ではモンゴル軍の集団戦に一騎打ち感覚で挑んだ日本の武士団は惨敗したが、国内戦ではその影響は少なかったようで、14世紀の南北朝内乱でも一騎打ちの名勝負が繰り返され、『太平記』では4尺(120cm)、5尺(150cm)、5尺3寸(160cm)の大太刀が見え、15世紀以降には6尺(180cm)、7尺(210cm)の大太刀も現れる。目立ったパフォーマンスで語り継がれたいとする一騎打ち時代の武士の願望が背景にあるのであろう。

戦国時代も末期、16世紀後半の統一戦争の時期になると足軽の集団戦の時代となり、織田信長は斎藤道三との会見に臨む際には「三間中柄の朱やり五百本ばかり、弓・鉄砲五百挺」と三間半(6.3m)の柄の長槍を持った500人規模の足軽隊を弓・鉄砲隊とともに用意した。集団戦の時代となって武器の大量生産と規格化が進み、武士の個性を際立たせた一騎打ちは過去のものとなった。そして江戸時代の幕藩体制

下では武器としての鉞は基本的には姿を消したのである。

### 7) 金太郎の鉞・花祭りの鬼の鉞

鉞は数は少なかったが兜の鉢を割るという恐怖感を植え付ける武器だったため、人々の印象には強く残ったようで、武家の家紋のデザインとなり、金太郎の話や奥三河の花祭りの鬼の得物にも登場している。

「鉞担いだ金太郎、熊にまたがりお馬の稽古」との歌を聞いた時の子供時代の印象は、金太郎は山育ちなので樵の斧を担いでいるのだと漠然と考えていたが、大人でも力自慢の大男しか使えない武器の鉞を子供ながら軽々と使っている、金太郎ってすごい力持ちだった、大きくなって立派な武士になるんだよ、という話だったことになる。

図 17 の奥三河の花祭りの榊鬼は、木製の祭具でも 2.5 kg という大鉞を持っているが、これは樵の製材のハツリヨキではなく武器の兜の鉢割りの鉞と考えれば、力の強そうな大鬼が持つ意味も恐ろしさも、恐ろしさと強さゆえに人々が抱いた辟邪効果の大きさへの期待感も理解できる。

中世から近世への社会の大転換で武器の鉞は姿を消したが、恐ろしい武器の鉞の記憶はまだ人々の心に深く刻まれていた。近世から近代への転換はその記憶を薄れさせ、第二次大戦後の高度成長がその残るかすも消し去ったのであろう。

近世社会は社会構造が近代社会と似ており、文化も継承されてきているのでイメージしやすい社会であるが、仏神へのまつりごとが政治そのものであった中世社会は現代人からはイメージしにくい社会で、中世の様子はなかなか掴みたいのが現状である。そこで小さな例にすぎないが鉞の使用状況が見つかったので、この場を借りて紹介してみた次第である。

### 8) 武器の鉞とハツリヨキの関係

斧の一種で製材用のハツリヨキをマサカリと呼ぶ例がまま見られる。この名称は鉞が転用されてハツリヨキになったのか、ただ形が似ているからそう呼んだのか、この点については突っ込んだ検討もなされてこなかったようなので、この際に検討しておこうと思う。結論的には転用ではなく、形が似ているからそう呼んだものと考えられる。

伐採した木材を山で角材に粗加工することは古代からもおこなわれていたようで、寺院の円柱も山で一旦粗作りした角材を、建設現場で角をはつて 8 角材にし、さらに 16 角、32 角と円に近づけていく技法があった。山では当初は切りヨキをはつり作業にも使っていたであろうが、大寺社や宮殿・武家の館建築は途切れることなく続いたので、切りヨキからハツリヨキへの分化は山の現場で起きていたであろう。日本列島の北から南まで、それぞれの地域には山があり職人たちが製材していた。その職人たちには鍛冶職人が専用のハツリヨキを供給していたのであり、個体数も武器の鉞よりはるかに数が多かったと考えられる。

他方、武器の鉞は平安時代には対蝦夷戦争の歩兵用武器として使われており、武士の活躍する中世に兜の鉢割りとして特化した。しかしながらマイナーな武器であり、『太平記』の土岐長山の鉞も、おそらく長山自身が鍛冶職人に打たせた特注品で、大きさも重さも自分の使いやすい大きさと、ちょうど使い良い長さの柄を上げさせたのであろう。武士の鉞はその家に先祖何某の使った鉞として伝承されていくので、鉞からハツリヨキへの転用は基本的には起こらなかったのではないか。

切りヨキ・ハツリヨキ・割りヨキのどれをとっても、山の作業道具は長時間使い続けるものなので、斧の重さや形状は樹に対する加工効率と使い手の疲れにくい重さの微妙なバランスの上に成り立っているのに対して、武器の鉞は戦場という命を賭けた火事場の馬鹿力が出る場での道具であり、兜を叩き割る効率を重視して重く作ってある。そのためよほどの力自慢の武士でしか使えなかった。この鉞を山の作業現場に持ち込んでも誰も使わなかったであろう。

大きく振りかぶって振り下ろす鉞は断面は厚みのある形状と考えられるので割りヨキに近いが、重すぎて山の作業には向かないであろう。刃広の平面形はハツリヨキに似ているが、ハツリヨキは横たえた丸太の上に乗って下を向いて側面を削って角材に仕上げる道具であり、断面は割りヨキに比べて薄手であり鉞とは重さも断面形も異なるので、鉞を転用してハツリヨキには使えないであろう。

鉞はマイナーな武器だったが、恐ろしさで有名な武器であり、百姓身分より 1 ランク高い武士身分の使った道具の名称なので、形の似通った刃幅の広いハツリヨキは、高貴な雰囲気漂うマサカリと呼ばれるようになったと考えられる。

以上は未検証の仮説だが、蓋然性の高い推測なので、ひとまず仮説として提起しておきたい。
















### おわりに

これまで私自身が分析を深めてきた農耕具を中心に解説してきたが、近年、日本人が農具を発明・開発するのは千歯扱き・万石通し・踏車など江戸時代になってからで、弥生時代・古墳時代・古代・中世では農具は基本的には朝鮮半島や中国江南地方からの伝来品であったことが明らかになってきた。そうならば収蔵庫の民具整理にあたっては日本・朝鮮半島・中国を視野に含む気象衛星の高さからの視点が求められることになる。民具整理はまずは個別の民具と 1 対 1 で向き合って撮影・計測しながら観察し、モノ語で話す民具から歴史民俗情報を聞き出すことから始まる。そして聞き出した歴史民俗情報は思い切り大胆に気象衛星の視点で東アジア史のなかに位置づける必要がある。「マイクロ分析、マクロな位置づけ」、これが民具整理のキーポイントとなろう。

名称	説明	さまざまな呼称
<b>農耕用具</b>		河野通明
耕起・代掻き		
<b>鍬と鋤</b>	人力の土掘り具のうち、刃に対して柄がL字形に直角から鋭角に取りつけられたものを鍬と呼び、振り下ろして土を掘り、引き寄せて土寄せ・除草・畦塗りなどに使う。これに対して刃と柄が直線上かやや鈍角につけられたものを鋤と呼び、シャベル・スコップに相当するもので、溝掘りや土を掘ってはね捨てるのに使った。	
 <b>くわ 鍬</b>	鍬には、「風呂」と呼ぶ柄つきの木製鍬平に鉄製の鍬先をはめ込む風呂鍬と、ヒツと呼ばれる四角い鉄製ソケットに柄を挿し込むヒツ鍬の2系統があった。風呂鍬は古代から使われた鍬なのに対して、ヒツ鍬は江戸時代に中国から伝わったもので、厚手で細身の鍬先のついた開墾用の「唐鍬」、鍬先が3本や4本に分かれた備中鍬がある。昭和に入ると四角い鍬平に柄を挿し込んだ「金鍬」が風呂鍬に代わって普及し、現在ホームセンターで売られている家庭菜園用の鍬も金鍬である。	【鍬】かだいかしら・かんがら・かんだい・くわーがら・くわがら・くわでやかしら・くわんだい・こいち・さくりくわ・さくりつか・じほり・とうちむん・ばい・ばがい・ばち・ばちくわ・ふあーい・ペー・モーずえ・もつた 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鍬】かんがら・こい・こいち・とちむん・ばい・ばかい・はびろ・ペー・こまがて・てんが 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 <b>ふろぐわ 風呂鍬</b>	「風呂」と呼ぶ柄つきの木製鍬平に鉄製の鍬先をはめ込んだ鍬で、古代以来の伝統的な鍬。中世までは刃先が丸い丸先鍬で全体が地金製だったが、戦国時代末期に刃金をつけた角先鍬が開発され、それが江戸時代に農具に普及した。刃金がついたことで、年1回鍛冶屋に出して減った刃を補修する先掛けが習慣となり、柄は檜木屋・樺屋と呼ぶ木工職人が製作した。	
 <b>くろくわ 黒鍬</b>	戦国大名の工兵隊「黒鍬組」が使っていた土木用の鍬の後裔で、柄の長さはやや短めの90cm台だが風呂部と刃先は大振りです。「大鍬」とも呼ばれる。一般農民も大名から土木工事に動員されたので、土木工事に大鍬を常備したが、土木役が金納に変わりで、さらに唐鍬や備中鍬の出現で使用場面が減り、鍬平が大きいのので畦塗りによく使ったという。	
 <b>びちゅうぐわ 備中鍬</b>	2本から4本の刃（歯）を持つ鉄製の股鍬で、関東ではマンノウ（万能）とも呼ばれている。柄を挿し込むヒツをもつことから中国伝来と考えられ、備中鍬は国内での主産地の名称であろう。江戸時代中期以降に出現し、深耕用の鍬として広く用いられた。	【三つ爪の鍬】あひ・かぎぐわ・くまで・くまんぐわ・くまんが・こまざら・こまざらい・こまざらえ・さんぼんあし・さんぼんぐわ・さんぼんこ・さんぼんずめ・さんぼんまんが・たくわ・まぐわ・またぐわ・まのくわ・まんが・まんのー・まんのーぐわ・まんの・まんのんが・みつくまで・みつこ・みつぐわ・みつめ・みつんが 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【備中鍬】くまで・みつこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 <b>とうぐわ 唐鍬</b>	鉄製の細くて肉厚の鍬平に柄を挿し込む方形のヒツを備えた開墾鍬で、江戸時代前期に中国から伝来。開墾・切株起こし・植林・焼畑の整地・土木工事に用いた。	【唐鍬】がじ・かぶきり・かぶきりとんが・かみしも・かみしもぐわ・さがら・じんのくわ・ひらとー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【唐鍬】がじ・かぶきり・さがら・ばち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 <b>てぐわ 手鍬</b>	しゃがんで使う柄の短い小形の鍬で、焼畑や傾斜地の畑などの作業、芋類の収穫、種芋植えなどに使う。	【小さい鍬】ちよんが・ちよろんが・ちよんちよん・ちよんちよんぐわ・ちよんなんが 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【手鍬】てが 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 <b>ふぐし</b>	根菜類の収穫などに用いる小形の直棒状の農具で、T字形把手の柄に鉄刃をつけたもののほか、さまざまな形態がある。	【土に穴をあける串】くじり・ちーさび・つくしほー・とくし・ふぐし・ほそ・つくぼー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 <b>へら 篋</b>	くの字に曲がった短い柄にへら状の細長い鉄刃をつけた農具で、奄美大島から沖縄県にかけて使われる。柄を握って刃が地面を擦るように向こうに押し使え、除草やサツマイモ掘りをした。じら、フィラなどと呼ばれる。また先の尖った種類はクイと呼ばれる。	
 <b>ほりぼう 掘棒</b>	山芋は地下に垂直に伸びて1mを超すが、その山芋を傷つけないで掘る専用農具で、南九州で広く使われる。長さ20cmほどのへら状の鉄刃に長い柄をつけて全長150~200cm前後で、山芋に沿っていねいに掘り下げていく。地域呼称はキンツキ（金突）、キンツ。	
 <b>かぶきりぐわ 株切り鍬</b>	稲刈り後の稲株を切り割る専用の鍬で、ヒツをもつ金鍬の刃を菱形に広げたもの。稲株を早く腐らせて土になじませるのがねらいで、また犁耕の際の抵抗をへらす効果もあった。	
 <b>かぶきり 株切り</b>	稲の刈株を足で踏んで切り割るもので、鉄の踏板の裏に半円形の刃を溶接したもの。踏板の側面に4つのフックが溶接されており、フックに縄を掛けて両足に履き、稲の古株を踏み割る。富山県氷見市ではカブワリ（株割）。	

名称	説明	さまざまな呼称
 くれわり 塊割	麦の播種の前に「くれ」（土塊）を砕きつぶすもので、埼玉県ではツブテッコワシ。竹の長い柄にT字形に横木をつけた横槌タイプと、縦木に木の長い柄をつけ、縦木の裏面に鋸歯を刻んだり歯を植え込んだものもある。	
 どろよけ 泥除け	湿田の耕起の際に鍬の柄を通して泥の跳ね返りを防ぐ用具で、板製や竹編み・蔓編みのものがある。会津ではテヅラ、富山県氷見ではテドリ、テデ。	
<b>鋤と踏鋤</b>	鋤類には全長が胸のあたりで刃と柄が直線かやや鈍角につけられ、真下に踏み込む短身鋤と、全長が肩の高さを超え、斜め前方に踏み込む長身鋤タイプがある。ここでは前者を「鋤」、後者を「踏鋤」と分けて記述した。	
 すき 鋤	刃と柄が直線かやや鈍角につけられた人力の耕起具。シャベル・スコップに相当するもので、肩部に足をかけて踏み込む。溝掘りや一毛作田での冬の水抜き溝を掘るなど、土木具として使うことが多い。	【鋤】かたがー・かまじゃくし・きつたてずき・こがら・しゃくし・しゃくれ・すきくわ・つきくわ・はびろ・ふすき・へら・ほり 【手鋤】ふくすい・ほすくい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鋤】かまじゃくし・しゃくし・ふすき・へら・かまじゃくし・すきくわ・ほり 【手鋤】ほすくい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ふみすき 踏鋤	全長が肩の高さを超える長身の鋤で、鋤平と柄は鈍角に前屈し、踏板か床尻に足をかけて斜め前方に数度踏み込み、柄を下げて梃子の原理で畑を起す。鋤床と柄が柄組みの中部・関東型と一木造りの東北型がある。	
 げたびつちゅう 下駄備中	鉄製4本歯の鋤の柄の根元部分から後方に梃子棒をつけ、その先端に下駄をつけて履く。もう一方の足で鋤の肩を踏み込んで、柄を手前に倒すと梃子の原理で土塊が前方に返される。東海地方や滋賀県で湿田土壌の耕起に重宝された。「ハネクリピッチェウ」「チョンコロ」とも呼ばれた。	
<b>スキとカラスキ</b>	奈良時代から江戸時代まで、古辞書でも和歌でも牛の引く犁はカラスキと呼ばれ、人の使う在来スコップをスキと呼んで明確に区別されてきた。明治になって福岡の抱持立犁が深耕犁として人気を呼び、農商務省も高く評価したので、九州方言のスキが農学での標準語ようになって広まったが、鋤との区別がつきにくくなった。ここでは本来の姿に戻して牛馬の引く犁はカラスキ、人が踏み込む鋤はスキと呼び分けることを提案したい。	
 からすき 犁	牛馬に引かせ耕地を耕す畜力耕起具で、犁轆・犁柱・犁身の3部材で構成される三角枠無床犁と、犁轆・犁柱・犁床・犁柄の4部材で構成される四角枠長床犁、それに両者の要素の入り混じったタイプがある。江戸時代には西日本では小農民まで普及したが東日本では普及が上層農民にとどまり、犁耕しない地域も混在した。東北地方では明治時代に福岡の馬耕教師の活動で犁が初めて広まった。	【犁】いだい・こがら 【唐鋤】かのから 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 きんだいたんしょうすき 近代短床犁	九州の在来短床犁をベースに犁柱を鉄製のボルトに、犁轆と犁身の接合は鉄製ジョイントにし、鋳物の床金をつけた改良犁。明治の末に開発され、大正・昭和期に各地に広まって、畜力耕起具の主流となった。もとは左反転（高知県は右反転）固定の単用犁だが、レバー操作で犁への左右の向きを変えられる双用犁や、犁先の前に小型の犁先を追加した二段耕犁も開発された。	
 plow プラウ	明治初年に北海道開拓に導入された北欧犁で、犁先と一体の右反転の撥土版を備えた双柄犁。第二次大戦後、小型に改良され東北地方や開拓地で使われた。	
 cultivator カルチベーター	牛馬に引かせて裏作麦の畝立て・中耕・土寄せ・除草に使う鉄製農具で、前に小さな車輪があり、後ろに犁先、中ほど左右に土掘り爪がつき、2本の把手がつく。昭和22年頃から使われはじめ、畝で1日掛かった畝立てが1時間ですむと歓迎されたが、30年代に動力耕耘機が出現すると取って代わられた。	
<b>人力犁</b>	「人力犁」という言葉は人によって指すものが異なり混乱を招いている。人力で使う犁には①人が牛代わりに引くタイプ、②男二人が向き合って犁轆先と犁身先を握り、かけ声を掛け合って土を起こすタイプ、③T字形把手の付いた犁轆先を握って後退しながら引くタイプの3種類がある。ここでは分類名としては①を「人引き犁」、②を「二人犁」、③を「後退引き犁」と呼んで区別することにし、民俗語を尊重する方針から①は夫婦犁、③は源五兵衛犁とした。	
 めおとすき 夫婦犁	牛馬の代わりに人が引く犁で、山梨県の「夫婦犁」は妻が引き、夫は犁身にもたれ込んで押しながら耕起する。南アルプス山麓の旧巨麻郡に分布し、入植時に牛馬が手に入らなかった高句麗難民の工夫に始まると考えられる。富山県氷見市の「ヒトンマ」は小型の在来犁を女性が数人で引くもので、男が漁業に出る漁村の水田の漏水防止の代りに使われたもので、近代起源である。	

名 称	説 明	さまざまな呼称
 ふたりすき 二人犁	男二人が向き合って細身の三角棒犁の犁轅先と把手を握り、リズムを合わせて犁先を地面に差し込み土をはね上げる田畑の耕起具。岐阜県高山市の山間部ではヒッカ（引鋤）、山梨県南アルプス山中ではフタリスキと呼ばれ、山梨県富士吉田市や神奈川県小田原市でも使われた。分布からは入植時に牛馬が手に入らなかった高句麗難民の工夫が始まると考えられる。	
 げんごべえからすき 源五兵衛犁	畑の中耕具で、長床犁の犁床に斜め上方に伸びる引棒をつけ、人は犁柱につけた縄を掛け、引棒先端のT字形把手を持って後退しながら引く。麦の畝間を引いての土寄せや、野菜畑の耕しに使った。『農具便利論』（1822）には「源五兵衛犁」の名で掲載され、西日本では広く使われた。	
 まぐわ 馬鋤	田に水を張ったあと、土塊を碎き均すための畜力代掻き具。櫛の歯状の台木に2本の引棒と鳥居形把手がつく。9～11本ほどの鉄製歯がつくが、20本超の木製歯をつけた均し馬鋤もある。古墳時代に伝来して全国的に使われた。	【馬鋤（まんが）】かいが・しか 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 くるままぐわ 車馬鋤	通常の歯の前に回転歯をつけた馬鋤で、水田の荒起こし後や、稲刈り後の麦作のためのすき返し後の土塊を砕くのに用いられた。鬼馬鋤とも呼ばれた。江戸時代の『農具便利論』（1822）にも車馬鋤として出ている。	
 うねたてまぐわ 畝立馬鋤	馬鋤の10本前後の歯の代わりに3～4枚のU字形板を間隔をあけて取りつけた変形馬鋤で、耕起後の畝立てに使った。九州地方だけで使われる朝鮮系農具で、ワタイモガ（新しく渡ってきた馬鋤）とも呼ばれている。	
 ひこうきまぐわ 飛行機馬鋤	折りたたみ式の両翼の下面に鎌刀歯を並べた畑用の碎土具で、畝間を牛馬に引かせ、人が乗って重さをかけた。水田裏作の畝立て後、両側の畝を壊さないで碎土できるもので、明治末年に発明されて以降、全国的に普及した。	
 たにあげき 谷揚機	水田裏作の栽培で、犁で畝立てし飛行機馬鋤で谷の両側の畝の碎土をした後、谷揚機で谷に落ちた土を両側の畝に上げて整える。1920年代中頃からおもに西日本で普及した。溝さらい機、畦立機（うねたてき）とも呼ばれる。	
 ふりまんが 振馬鋤	人が左右に振って使う馬鋤型碎土具で、台木に前後に振り分けた歯を植え鳥居形把手をつけたもの。おもに裏作の畦床部分の碎土に使われた。鳥居形把手を2つ備えた二人用もあり、向き合って左右に放るよう振ることからハウリマンガとも呼ばれる。	
 かいてんばさいどき 回転刃碎土機	手裏剣型の回転刃をつけた畜力碎土機で、中ほどで折れ曲がり左右に後退した車軸に、左右3枚ずつ回転刃がつく。「碎土機」「刃車型回転碎土機」ともいわれる。水田の代掻きや藁やレンゲのすき込みにすぐれていた。	
牛馬の装具		
 くびき 首木	牛の頸に掛けて犁や馬鋤を引かせる牽引具で、中ほどで曲がった丸棒の両端に引綱をつける。中国や朝鮮半島では首木だけで引かせる首引き法だが、日本では首木と鞍を併用する首引き胴引き法や鞍だけで引かせる胴引き法が主流。	
 はも	馬の頸につけて引綱をつけ、肩で引かせる西洋系の牽引具。下端で連結したU字形の木枠の内側に藁束を厚布でくるんだパッドを取りつけたもので、馬の頸に下から装着して頂部で留め、左右の枠の中ほどに引綱をつけて犁・馬鋤や馬車を引かせた。	
鞍	鞍は古墳時代に朝鮮半島から馬とともに「乗馬鞍」と「荷鞍」が伝わり、荷鞍を小型化して「農耕鞍」が生まれた。奈良時代には中国から遊牧系の「唐鞍（からくら）」が伝わった。平安時代には唐鞍に柄組みを加えた頑丈な「和鞍（やまとぐら）」が誕生し、武士の鞍として江戸時代まで使われた。明治になると陸軍がヨーロッパの革製の乗馬鞍を導入、また大正・昭和期に2輪、4輪の荷馬車が運送の主役になると、農耕鞍に鉄製の轆棒受けをつけた「馬車引き鞍」が現れた。	
 のうこうぐら 農耕鞍	牛馬の背につけて農具を引かせる小型の鞍で、クラ・コグラ・ヒキグラ・タグラ・テーキ（田引きカ）などと呼ばれる。腹帯で背中に固定し、むながい・しりがいで前後のずれを防いだ。伝統的農耕鞍は木製の鞍骨だが、バネの効いた逆U字形鋼帯の内側に、ズック地の厚手のパッドを取りつけた「近代独橋鞍」がメーカー品として流通した。	















名称	説明	さまざまな呼称
 しりがせ 尻枷	牛馬に犁を引かせるための60~70cmの棒で、首木や鞍から伸びた引綱を尻枷の両端に括りつけ、その中点に犁を繋いで引かせる。シリガセ・シリガシ・ヒキギ・ヨコガセなどと呼ばれる。	
 たかばよ 竹ばよ	牛馬に馬銜を引かせるときに使う細い竹を使った引綱で、牛馬の左側にだけ使う。材はネマガリダケ。牛馬は転回する際に鼻取りに誘導されて右側に曲がる。そのとき左側の引綱が牛馬の後脚の肌を擦って傷つけるので、外側に湾曲した細竹のタカバヨを左側に用いた。福島県ではタカバヨ、ハヨウダケ、富山県ではシチョウダケ、タケベッコなどと呼ばれる。	
 はなぎ 鼻木	牛の鼻に木製の輪を通し、手綱を結んで牛を統御するもので、ハナグリ(鼻線)とも呼ばれる。幼牛の鼻中隔の軟骨に穴をあけ皮をむいた若枝を蔓のように曲げて通したもので、原型は蔓の両端を交差させて括ったものだが、10cm余りの角材の両端に蔓を通してD字形に仕上げたものが中世にはすでに見られ、鼻木の主流となっている。	
 くつわ 轡	馬を統御するために馬の口に噛ませる金具で、中央で連結した長さ15cmほどの鉄棒=銜(はみ)の両端に鉄環をはめたもの。連結部分を馬に噛ませ、両端の鉄環に面懸をつけて馬の顔に装着し、また手綱をつけて馬を統御する。左右の手綱を引けば銜が馬の舌を圧迫するので馬は言うことをきく。	
 はなばし 鼻竿	耕起や代掻き時に馬を誘導するための竹竿で3m前後。手綱では馬が近づいて危険なので、一定の距離を保てるように竿を使う。東日本では男は馬銜を扱うシンドリ(尻取)役で女や子供が鼻竿で馬を誘導するハナドリ(鼻取)をつとめた。	
 くつご 口籠	牛馬の口にはめて農作業中に作物を食べないようにする籠。竹籠や藁縄製、針金編みの籠がある。中耕・除草・培土など作物の育成した田畑で牛馬を使うときに用いた。	
種蒔・田植		
 たねいれ 種入れ	野菜の種を鼠に食われないよう保存しておくための容器で、壺やひょうたんなどが使われた。	
 たねまき 種蒔機	底を狭くした漏斗形の種箱に小さな二輪をつけ、柄を押して前進すると車輪と連動して木箱の底の繰り出し装置が一定間隔で種を蒔くしくみで、麦の種蒔きに使われた。	
 なわしろご 苗代鍬	苗代の床面を擦って平らにする木製の鍬。左官の鍬を大型にした形で、蒔いた種籾を土中に擦り込むのにも使用される。長い柄をつけたタイプもある。	
 なわしろしめ 苗代締め	苗代の代掻き後、泥を突き締めて表面を平らに均す道具で、横板に把手をつけている。把手は馬銜に見られる鳥居形把手や蔓を半円形に曲げたものがあり、多くは自製。	
 たねおち 種籾鎮圧機	幅30cmほどの金網製ロールに長い柄がつけられたもので、苗代に蒔いた種籾を押さえつける。種籾は土を被せると発芽しにくいので、苗代の表面にやさしく活着させるための道具である。	【種籾鎮圧機】網ローラ、メッシュローラ、以上『写真でたどる農機具の発達史』
 もみぐらやき 籾殻焼	保温折衷苗代の床に撒く籾殻の黒焼き(燻炭)をつくる道具。ブリキ製で四角錐形の基台中央に長い煙突をつけたもので高さ90cm前後。台部と煙突の下半分ほどに小さな空気穴が空けられていて、火をつけた藁の上に煙突を据えて籾殻を被せて蒸し焼きにした。	
 えぶり 柄振	田植え前に田面を擦って均すための道具で、横板に柄をT字やY字形に取りつけたもの。柄がY字に分かれて板に取りつけるタイプでは、押し引きによって板が前後に倒れるものが多い。	
 たぶね(小型) 田舟	湿田で苗を運んだり刈り取った稲束を運ぶための箱船で、長さ1m前後で底は前後が反り上がっている。弥生時代には一木を刳りぬいた田舟が使われていた。	
 たぶね(大型) 田舟	湿田地帯で人が乗り水路を往復して牛や稲束を運ぶ底の平らな舟。	



名称	説明	さまざまな呼称
 <p>なえかご 苗籠</p>	苗代から田植えする田へ苗を運ぶ籠で、天秤棒の前後につけて運ぶ。苗入れは皿状から深さをもつ籠など多様で、天秤棒に縄で吊すタイプから棒に直接取りつけたタイプなど様々な形態がある。	
 <p>おおあし 大足</p>	泥田に肥料用の刈草（刈敷）を踏み込んだり、田面を擦って均すための大型の木杵で、草を押し込む横棧を並べ鼻緒つきの長板を取りつけたタイプが主流。前杵に取りつけた縄を引き上げながら歩行する重労働で、男の仕事だった。	
 <p>たうえなわ 田植縄</p>	田植えの間隔を一定にするための縄で、目盛がつけられていたり、糸巻に巻くものもある。田面を転がす田植杵が使われると、杵が曲がっていかないように田植縄を張って基準線とした。	
 <p>たうえわく 田植杵</p>	苗を縦横そろった正条植えにするため、田の土に筋痕をつける木杵。梯子形、三角杵、六角杵もあり、六角杵は田面を転がせて杵の交点に植える前進田植えとなった。	
 <p>かたつけき 形付け器</p>	2～3mの桁に株間に合わせた細棒を10本前後、目の粗い櫛のようにつけ、桁の中ほどに柄をつけたもので、田面を引きずって田植えのための筋をつけた。	
<b>施肥・除草</b>		
 <p>じょれん 鋤簾</p>	鋤型の農具で鋤平部分に竹簧や金網をつけて水を切って砂利だけを掬えるようにした農具で、柄から鋤平を支える鉄製の蔓がついている。田畑の土寄せや土入れ、溝掘りや、砂利の掻き上げなど、広く使われた。	【鋤簾】よそろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 <p>むぎのつちいれ 麦の土入</p>	麦の株間の土をすくって株の間に振り入れ、麦の生長を助ける道具。網底の土すくいに長い柄をつけたもので、スプーン型で前進して使うタイプと、鋤簾型で手前にすくって後退しながら使うタイプがあった。	
 <p>りんてんつちいれき 輪転土入機</p>	牛馬に麦の畝間を引かせ、車輪の外周に取りつけたバケットが土をすくって真上にきたときに両側の麦の株間に土をかけるもの。戦後にかなり普及した。	
 <p>こえおけ 肥桶</p>	下肥を入れて天秤棒で前後に吊るして田畑まで運ぶ桶。米のとぎ汁や風呂の残り湯を溜めたものも運んだ。	【肥桶（こえおけ）】あげおけ・おりつぼ・こえめこ・こーだる・こが・こがつぼ・ひおけ 【肥桶（こえたご）】えんこたんこ・かずきおけ・かずきだる・かたねおけ・かたのけ・けすおけ・けすたる・けすたんか・さんじゃく・さんじゃくたが・さんじゃくもん・しょんべき・しょんべけ・しょんべたんこ・しょんべんぶり・しょんぼけ・たーご・だーたご・たおけ・だおけ・たが・たがおけ・たご・たごおけ・たごけ・だつおけ・たぶりんこ・だぼ・だら・だらおけ・だりおけ・たる・だる・だんか・だんかおけ・たんご・たんごおけ・だんぼ・たんぼーだー・つのおけ・とーご・ふりおけ・ぶりおけ・ぶりんこ・ぶりんこ・ふるおけ・やしにゃーおけ・よつだる 【背に負う肥桶】おねおけ・たる・たるー 【下肥をためておく桶】あげおけ・いつぼ・うつし・けすため・ころがし・ころばし・つぶけ・つぼ・つぼーけ・つぼけ・つぼんど・ときたが・はず 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【肥桶（こえたご）】うせたご・かけ・かたねおけ・かたのけ・けすおけ・さんじゃく・しょんぼけ・だんぼー・ぶりおけ・ぶりんこ・よつだる・けすだる・たがら・たごけ・だつおけ・ためおけ・さけ・だらおけ・たんご・つまじりおけ・やな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 <p>こえだる 肥樽</p>	下肥を入れて遠くの田畑まで運ぶ桶で、細長く中味が漏れないように、蓋と栓がついている。馬の鞍の左右に2本ずつつけて運んだ。	

名称	説明	さまざまな呼称
 くまで 熊手	厩舎や堆肥置き場で掻き寄せたり掻き混ぜたりする道具で、形はまたぐわに似るが、歯の先は尖っていて軽い。2本歯、3本歯、4本歯がある。	【熊手】 いっぽで・かいどし・かじくわ・かながき・かまがき・かやかきぼー・がんぎ・がんざき・がんざらえ・がんじき・がんじょき・がんずめ・がんずり・がんせき・がんでき・がんりき・こきばかき・こくばかき・こくばさで・こくまさで・こくもかき・こたさで・こっばかき・こっばさで・こでかき・こなし・こみかき・こみざらい・させかき・さで・さでかき・さでかきさらえ・さではき・さでま・さらい・ざらかき・さんぼんずめ・すくずかき・すくぞかき・つめくわ・てんび・ぼち・ぱりん・ぱりんかき・ぱりんばき・ぱれん・はんじ・はんで・びびら・びぶら・びんびら・べぶら・べるば・まくわ・まんが・もくさで・よつくわ・よつで・わらすぐり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【熊手】 かぎ・かしげ・かちやばき・かつあび・かながき・かまがき・かやかきぼー・がんき・がんざき・がんじき・がんずり・がんせき・がんりき・くさかき・くずかき・こーかき・こかき・こくばかき・こくばさで・こたさで・こでかき・こまかき・こまでざらい・こまんざらい・こみかき・させかき・さで・さでかき・さではき・さでま・さらえ・すくずかき・てざらい・ぱりん・ぱりんかき・はんじ・はんち・ひきまた・びびら・びぶら・びんびら・まっばかき・さらい・まんが 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 こえだしかぎ 肥出し鉤	堆肥を掻きだすのに用いる鉤状農具。長い柄に小型の又鉤をつけたものや、東北地方では自然木の枝分かかれ材を使って枝先を尖らせ、柄はへのに字に曲がったものが多い。	
 こえおいこ 肥負子	口の開いた目の粗い背負籠で、ランドセル状に背負って堆肥を運ぶ。頭を保護するため背にあたる部分を高くしたものもある。	
 こえびしゃく 肥柄杓	小型の桶に1.5mほどの長い柄をつけた肥汲み用の柄杓。肥溜から汲み上げて肥桶に移す。また肥桶で運んだし尿を田畑に散布したり作物に施すときに片手で使う柄の短かい肥撒き杓がある。	【下肥をくむ柄杓】 あげしゃく・くみだし・だらびしゃく・だらびしゃく・だるびしゃく・ながえ（便所汲み出し用） 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【肥柄杓】 かくましぼー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 こえかけ 肥掛け	手桶に竹製の注ぎ口をつけた施肥具で、澄んだ下肥を畑作物にねらい打ちで追肥する道具。形から湯桶とも呼ばれ、ヒョットコと呼ぶ地域（東京都）もある。	
 たればかま 垂袴	馬の背鞍に木杵を載せ、左右の杵に編繩の底なし袋をつけ、裾を括って堆肥などを入れ、畑に着くと裾をほどいて堆肥をまく肥料運搬具。	
 じょそうつめ 除草爪	水田の雑草を手で掻いて除草し攪拌するときの爪の保護具。竹製や鉄製で指先にはめて使う。	
 がんとつめ 雁爪	3~4本の湾曲した鉄製歯に短い柄をつけたもので、両手に持って稲株間を掻いて除草する。打ち込んで手前に返すと草は土に埋まり、また稲の根を切ることで生長がよくなる。除草と中耕機能を兼ねたもの。	【草取り用具】 かじり・かつあ・がんずめ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 たかき 田掻き	中腰作業の除草を立ち作業に変えたもので、舟形杵に爪つき横棧を数本わたし、斜めの柄をつけて田面を前後に掻いて除草する。江戸時代に中国から伝来したと考えられ、回転除草機の原型となったが、並行して使われた。タカキ、カメ、ドンガメ、オカメサンなど呼ばれる。	
 かいてんじょそうき 回転除草機	固定歯の田掻きの改良型の除草機で、舟形杵に回転爪を前後にセットし、斜めの柄をつけて田面を前後に掻いて除草する。爪の工夫や左右2連で株間をまたいで除草するものなど、多様な形態が見られる。田打車、八反取りなど、名称も多様で形態とは対応していない。	【回転除草機】 オシガンツメ、ガンツメ、クサトリ、クサトリキ、クサトリグルマ、ゴロオン、ゴロガシ、コロバシ、コロパン、ジョソウキ、スイデンジョソウキ、タイチ、タイチグルマ、タウチグルマ、タウチテンジャ、タオシ、タオシグルマ、タカキ、タカキグルマ、タグルマ、タコロガシ、タズリ、タノクサトリ、タホリガラガラ、ガラガラ、テオシジョソウキ、ハッタン、ハッタンコロガシ、ハッタンズリ、ハッタンボ、オオラチ、ラチウチキ、オニグルマ、キカイ、テンジャ、ムカシタグルマ、以上、石野律子調査
 くさげずり 草削り	畑の除草に用いる鋏で、小型の半円形の刃がつく。『農具便利論』（1822）では河内地方でアブラゲマンノウ（油揚万能）と呼んだとある。	【草取鋏】 かいがい・くさかじり・さくきり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 くさかりがま 草刈鎌	三日月形の内湾刃に柄をつけた草刈用の鎌で、江戸時代までは稲刈りの鎌もこの形だったが、北陸で鋸刃の稲刈り鎌が出現、近代になって柄と刃が鈍角の稲刈り鎌が一般化して、本来の鎌が草刈り専用ようになった。	【草刈り用の小さな鎌】 かがいがま 【除草用の鎌】 せせり 【草刈り用の刃の薄い鎌】 かりがま 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【除草用の鎌】 かがいがま・せせり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）


名称	説明	さまざまな呼称
<b>灌漑</b>		
 ふみぐるま 踏車	<p>稲の生長期の水田に水を入れるための足踏み式水車で、ミズグルマ、スイシャ、ジャバラとも呼ばれている。スポークごとに水掻き板のついた直径120～150 cm前後の木製水車に4分の1周分を覆う袴と放水樋をつけたもので、水路に支柱を立てて樋を畦道に掛けて設置し、支柱につかまって水車の上に乗って階段を上るように踏んで水車を回す。17世紀後半に発明され、一人で運ぶことができる。竜骨車に比べて部品が少なくほとんど壊れないので全国に普及した。</p>	
 すっぽん	<p>15 cm角で長さ2～4 mほどの木製角筒に弁つきのピストン棒を仕込んだ揚水ポンプで、江戸時代からスッポンと呼ばれていた。水路に斜めに設置し、T字形把手を両手で握って棒を押し込めば弁が開き、引けば弁が閉じて水が筒からあふれ出る仕組み。踏車の揚水高が50 cm程度だったのに対して、3 mほどでも汲み上げることができた。</p>	
 りゅうこっしや 竜骨車	<p>長さ3～5 mの長い木枠に角樋と数十枚の水掻き板つき木製チェーンを仕組んだ中国伝来の灌漑用具で、水路に斜めに浸けてハンドルを回して水を掻き上げる。戦国時代から江戸時代にひろく使われたが、部品数と接合部が多くてメンテナンスが必要で、故障の少ない踏車に取って代わられた。滋賀県など一部では第二次大戦後まで使われた。</p>	
 りゅうびしや 竜尾車	<p>直径30 cm長さ2～3 mの薄手の筒桶の内部に螺旋を仕込み、上端に鉄製ハンドルをつけた灌漑用具で、古代地中海地方で使われていてアルキメデススクリューと呼ばれる。下端を水路に浸けて斜めに設置し、ハンドルを回すと筒自体が回転して上端から水があふれ出る。江戸時代はじめに中国から伝来し、水田の灌漑のほか鉱山の排水にも使われた。水上輪（すいしょうりん）とも呼ばれた。</p>	
 ふりつるべ 振釣瓶	<p>水汲み桶の左右の上端と下端に長い縄をつけ、2人が畦で向き合って桶の上下縄を操って桶を水路に投げ入れ、勢いよく桶を振り上げて田の上で左右の縄を操作して桶口を下に向けて水を吐き出させる。中国伝来農具で江戸時代から使われており、投げ釣瓶、フリニガイなどとも呼ばれる。</p>	
 みずかけおけ 水掛桶	<p>天秤棒で運ぶ水桶の底に直径3 cmほどの穴をあけて開閉自在の蓋をつけ、蓋から40 cmほどの操作棒をつけ、閉じた状態で水を汲み入れ、畑の畝の上で棒を引いて蓋を開いて灌水する。『農具便利論』（1822）では「水かけ桶」、『綿圃要務』（1833）では「底穴桶」。畿内では綿作や野菜畑の水やりに広く使われた。大阪ではソコヌケタンゴ。</p>	
 virtical pump バーチカルポンプ	<p>直径30 cm前後、長さ2 m前後の鉄製筒の内部下端にスクリューをつけ、軸の上端にプーリーをつけて発動機とベルトで繋いで回転させると上端の吐出口から勢いよく水が吹き出される。灌漑のほか洪水時の排水にも使われる。</p>	
 こうどけい 香時計	<p>抹香の燃える速さが一定という原理を使って溜池の水を公平に配分するためなどに使われた箱形の時計で、民俗語は「香盤」。2つ重ねの「重箱型」と上箱・下箱の間がくびれた「括れ型」があり、どちらも上箱が回転する。格子の蓋をあけ、上箱の灰面に香道のスリットを刻んだ型枠を当ててスリットに香を蒔き、香の燃える長さで時間を計るしくみ。</p>	
<b>害虫・害獣除け</b>		
 ゆうがとう 誘蛾灯	<p>田のそばに設置して夜中に点灯し、稲の害虫のニカメイガ（二化螟蛾）などをおびき寄せて取る道具で、直径40 cmほどのブリキ製の水盤に水を張って石油を数滴たらし、真ん中にカンテラ灯を据えて蛾を集めた。形態は多様。ニカメイガ（ニカメイチュウ）は6月と7～8月の2度大発生する害虫で、幼虫はイネノズイムシと呼ばれ茎のなかに潜んで食害する。1952年から農薬ホリドールが散布される以前はさかんに使われた。</p>	
 あぶらさし 油差し	<p>竹筒の底に小さな穴をあけた油入れ。尖った竹棒を挿して栓とし、時々栓を抜いて油を田面に落として拵がらせ、稲に水を掛けウんカをたたき落として油で飛べなくし、気孔を塞いで死なせる。江戸時代後期から鯨油を使って防除し、明治以降は石油を使うようになり、ブリキ製円筒の油差しも現れた。</p>	

名称	説明	さまざまな呼称
 どんおいむしくじよき 泥負虫駆除器	30 cmあまりのブリキの樋形の虫受けに長い柄を斜めにつけたもの。稲を横に扱うようにして稲泥負虫や稲青虫の幼虫を捕り、殺虫剤を入れたバケツに虫を落として殺した。農薬散布の広がる前、昭和10年代頃まで使われた。新潟県でデロハキ。	
 ふんむき 噴霧器	薬剤タンクをランドセルのように背負い、弓なりに曲がったレバーを左手で上下させてタンクに圧力をかけ、右手に長いノズルを持って農薬を散布するもの。	
 かび 蚊火	山野で働くとき、腰につけて蚊やブユ（ブヨ・ブト）を煙でいぶして追うもので、古布に髪の毛やヨモギの葉など匂いのきついものを混ぜ、細長くして藁などでかたく縛った。	【野山仕事の蚊遣火】かこー・かっこ・かぼて・こて・かび 【藁などを束ねた蚊やり】かび・かべ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かかし 案山子	稲刈り前の田に立てて鳥獣を追い払うための人形。毛髪や動物の毛を焼いて匂いで危険を察知させて追い払うカガシ（嗅がし）が語源とされる。	【案山子】いっさんぼー・おっじも・おっじもん・おどしてこ・おどらかし・おどりかし・おどろかし・おのし・おろし・かーがー・かかしたろー・かかしたろー・かかしんぼー・からすおどし・からすとぼし・からすのおどし・からすのとぼし・がんおどし・しめ・すずめおどかし・すずめおどし・すずめのおどし・すずめゆけ・ぜんもん・そーど・そめ・たのそめ・でーこ・でこすけ・でこまつ・とーぼし・とぼし・とりおどし・なーしるまふい・にんぎょー・にんじょー・ぬきむぬ・はしきざお・ぼーたまぶる・ぼーとー・もんがー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【案山子】いっさんぼー・おどし・おどらかし・おろし・かかし・からすおどし・からすとぼし・がんおどし・しめ・せめ・そーず・そめ・とーぼし・とぼし・とりおどし・なーしるまふい・ぼーとー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 おどし 威し	稲刈り前の田に立てて鳥獣を追い払うため、鳥の死骸やそれに見立てた黒布などを棒の先につける。	
 なるこ 鳴子	音で驚かせて稲の害鳥・害獣を追い払う道具で、小さな板に縄で竹管を並べて取りつけたもの。苗代や稲の実った田に竹棒を何本も立てて縄を張り巡らせて鳴子をつけ、鳥獣が来たら引き縄を引いて鳴子を鳴らして追い払う。山田では小さな田屋を立てて夜通し番をし、猪や鹿がくると鳴子を鳴らして追い払った。古語ではヒタ（引板）。	【鳴子】おどかし・おどし・がっちゃり・からすおどし・からすのおどし・かわどーずき・すずめおい・すずめおどし・すずめのおどし・すずめほい・すずめほい・どーずき・とりおどし・どんずき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鳴子】おどし・がっちゃり・がらがら・がらくた・がらんがらん・がががん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ばくおんき 爆音器	カーバイト（炭化カルシウム）に水を垂らしてアセチレンガスを発生させ、圧力が高まると点火して爆発し、大音響で鳥獣を追う装置。	
収穫・脱穀		
 ほつみぐ 穂摘具	粟やキビなどを刈り取る道具で、木片に鉄刃をつけ、木片に通した縄の輪に指を通して、掌で包みこむように穂を刈り取る。	
 むぎつみぐし 麦摘み櫛	柄に十数本の竹歯を少し隙間をあけて並べた櫛で、麦の穂を1本ずつ摘み取るのに使う。	
 かま 鎌	内湾した刃と柄がL字形に接合され、稲麦や草・木の枝などを手前に引いて切る刃物。刃の厚さは稲・麦を刈る薄鎌、牧草・雑草を刈り払う中厚鎌、柴や木の枝を刈る厚鎌がある。昭和に入ってから稲刈りには刃と柄が140度前後の鋸鎌が普及した。	【鎌】あやぎがま・あやがま・いざら・いーあら・いなーら・いらな・いらら・いんら・いんだ・がーき・がき・がぎ・がし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鎌】いらな・いんだ・がき・すへん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 のこぎりがま 鋸鎌	稲刈り専用の鎌で刃と柄が140度前後の鈍角に接合され、刃には鋸目が刻まれて、手前に引けば鋸刃で引き切るしくみになっている。	
 いねかりき 稲刈機	立ったまま稲刈りができるように工夫された農具で、刃部を稲の根元に当てT字形把手を両手で握って一気に押し切る。第二次大戦中に農村の労力不足対策として発明され昭和30年代まで使われたが、バインダーの普及で使われなくなった。	
 たげた 田下駄	湿田での稲刈り作業などで、体が沈まないように履く大型の履物で、鼻緒のついた縦長の板の周りに竹や木の円棒をつけた輪かんじき型、板に足受け棒のついたなんば型などがある。	
 こきくだ 扱管	稲の脱穀に使った道具で、2本の細竹を紐で繋いだもの。長さ5 cmほどの掌に納まるものと、18 cm前後で手からはみ出るタイプがある。江戸時代の千歯扱き普及以前は広く使われていたが、民具では奄美大島などにわずかに残る。『和漢三才図会』で「扱竹」、『成形図説』で稲管。奄美大島ではクダ、テクダ。	【稲扱の道具】いにしんふどーし（筆の柄ほどの竹を6cmくらいに2本切り、稈を差し込んでつないだもの） 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）





名称	説明	さまざまな呼称
 こぎばし 扱箸	稲・麦などの脱穀に使われた道具で、細棒や割竹の根元を括り、隙間に稲穂を挟み込んで舂を抜いて脱穀する。石臼の穴に立てたり、台木に立てて使うタイプもあった。千歯扱きの普及で姿を消し、ほとんど残っていない。	【稲扱の道具】 いなばし・こいばし・こーばし・こき・こきはし・こぎばし・こきんぼ・こばし・ぜちみよー以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 せんばこき 千歯扱	木製の台木に鉄歯を20本ほど櫛状に並べて固定し、歯の隙間に稲束を差し込んで扱く道具。明治になって刃を湾曲させ、両端でも穂切れが起こらない湾曲千歯も現れた。麦用の千歯扱きは刃と刃の間に隙間がある。足踏み脱穀機が普及して使用は減ったが種籾だけは千歯扱きを使うという人もいた。	【稲扱の道具】 せんば・せんばこき・せんばこぎ・せんばすこき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【稲扱・稲扱機】 いなひき・かなこき・こいばし・せんば・ぶり・まんが・まんがい・もみこなし・いねこがし・まんりき【稲扱機】 いさゆぎ・かなくだ・かなご・かなこばし・からはし・かんこ・こえばし・こーばし・こげたおし・こげなかせ・こじよる・こばし・せんこき・せんだこき・せんばこき・せんばすこき・たかせ・やまめ以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 あしふみだっこき 足踏み脱穀機	ループ状の釘を多数打ち込んだドラムを足踏みで回転させ、稲束から粗粒をはじき飛ばして脱穀する道具。大正時代から普及し、千歯扱きに置き換わっていった。朝鮮半島や中国にも広まった。	
 まきぼう 巻棒	麦束をしっかりと挟み、臼の胴や大きな石、麦打ち台に打ちつけて穂を落とす道具。南九州で使われる。	【豆の実をこきとる道具】 からはし・ばい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 もみたたき 舂叩き	千歯扱きで扱いた時の穂切れや、舂の芒（のぎ）を落とす道具。先を太く手元を細くした曲がり木や、棒に古い鋸を逆装着して鋸の背で打つものなど、さまざまな形がみられる。福島県ではモミヨウシ。	【そばの実をたたく棒】 こてぼー・いほんがらはし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 のぎおとし 芒落とし	昔の稲は芒が長く、調製過程で邪魔になるので、脱穀後に芒落としがおこなわれた。唐竿打ちもその一つだが、鹿児島県では竹の柄の根元に竹筒いくつも縛りつけて舂を突くサーシが使われた。福島県では堅杵の一方をマイナスドライバー状に加工したものもある。	
 おにば 鬼歯	麦打ち用の柄長の木槌で、杵部は太く短く、立って振り下ろしたときに下面が地面に密着するよう斜めに削り、鋸歯目を刻んでいる。麦や豆類の脱粒に使った。	
 からさお 唐竿	竹や木の柄の先や竿の先に、回転軸を介して棒や割竹・枝などを編んだ打穀部をつけ、竿を振って打穀部を回し、地面に広げた穂に打ちつけ脱穀する道具。大麦・大豆・小豆・蕎麦の脱穀や稲穂の芒落としに使った。打撃部には単棒や簾状、回転軸のあるものや紐繫ぎのものなど、多様な形態が各地に見られて単系進化では説明できない。関西ではカラサオ、関東ではクルリボウ。	【連枷】 かちんぼー・くるぼー・くるまーぼー・くるり・くるりぼー・けんが・ねぶりぼー・はいがち・ばいなげ・はでつぼー・ぶり・ふりうち・ぶりこ・ふりばい・ふりぼー・ふるちがえし・まいぎね・むがりぼー・めぐりぎね・めぐりぼー・まえざお・まんぶり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 むぎうちだい 麦打台	長方形の4脚台に割竹の簧の子をやや凸面に取りつけたもので、小麦の脱穀用。麦束を持って穂先を簧の子に数回叩きつけて脱粒する。	
 むぎすりき 麦すり器	大麦の脱粒用具で、千歯で大麦の穂を扱落したあとを天日に干し、乾燥した麦穂を上箱に入れ、前後の往復運動で脱粒させた。	
 まとおり	長さ50cmほどの二股や三股の自然木を利用した脱穀具で、ソバや大豆・小豆などの脱穀に利用する。股の部分で打ちやすいように、柄部分と反りをもたせているものが多い。マドリ・マメオトシなどとも呼ぶ。	
調製・選別		
 もみかき 舂掻き	稲籾や麦、雑穀等を天日干しにすると、籾の上に広げたり、かきまぜてむらなく乾燥させた。長柄の先にT字形に横板をつけたエブリ形で、横板に鋸歯を刻んだり横木に木製歯を埋め込んだものもある。モミサガシ、サラエとも呼ばれる。	
 もみどおし 舂通し	千歯扱きで脱穀すると籾に藁屑や穂のままちぎれたものが混じるので、そのなかから籾だけを選別する粗目の通し。蔓類を編み上げた円筒形や、板製の吊し箱形など、多様な形態がある。ポータトオシ（富山）、ユリケンド（大阪）。	【籾をふるうのに用いる】 かごどーし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【竹製の舂篩】 かごどし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
<b>木摺臼と土摺臼</b>	古代から木製往復回転の初摺臼が使われ「するす」と呼ばれていた。江戸時代に中国から籠に粘土を詰め堅木の歯を打ち込んだ全回転臼が伝わると関西では「とうす（土臼）」、関東地方では「からうす（唐臼）」と呼んだが、カラウスは古代から踏み臼（碓）を指すので呼称の混乱の原因となった。東北地方の木製往復回転臼を「きずるす（木摺臼）」、土詰め全回転臼を「どずるす（土摺臼）」とする呼び分けは明快であり、先行研究でも使われはじめていたので、共通名とすることを提案したい。	
 きずるす 木摺臼	木製の初すり臼で、上臼・下臼からなり、下臼には円錐摺り面に放射目が刻まれ軸棒が立っている。上臼上部はすり鉢状に削られて粉を入れる漏斗となり、上臼の穴は10cm前後で軸棒との隙間が供給口になっている。上臼の側面には縄穴が挟まれてそれぞれ2本の縄が結ばれており、2人が脚を投げ出して座って左右の縄を交互に引いて上臼を往復回転させた。上臼には軸受け棧がはめられて上臼のぶれを防いでいる。	【大木を胴切りにして作ったもみすり臼】ほたうす 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 どずるす 土摺臼	竹籠や桶の胴に塩を混ぜた粘土を詰めて固め、カシなどの堅木や竹の歯を8分画や6分画に平行して打ち込んだ初摺臼で、摺り面は平面で遣木（やりぎ）を使って数人で全回転させる。戦国時代末から江戸時代にかけて中国から伝来し、江戸時代には効率はいいが碎米が出るとして幕府や藩からしばしば禁令がでたが、木摺臼に徐々に置き換わっていった。	【土製のもみすりうす】つちするす・どずるうす・どずるす・どろうす・どろだおし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ぜんかいてんきずるす 全回転木摺臼	木製の全回転臼で、九州には中国の木礮の後裔と見られる深い鋸目の全回転臼が見られる。それとは別に東北地方には木摺臼職人が土摺臼を真似て創ったと考えられる全回転で平坦摺り面に分画目を鑿で刻んだ全回転木摺臼が見られる。	
 おおうちわ 大団扇	稲や麦の実と芒、殻、ちりなどを吹き分ける大型の団扇で、箕で穀物類を落としながら団扇で扇いで軽いものを飛ばす。江戸時代からおもに西日本で使われた。	
 あおり 扇	稲や麦の実と芒、殻、ちりなどを吹き分ける道具で、2枚の三角形の大団扇を根元で連結し、長い竹を折り曲げて左右の中ほどに団扇を取り付け、上端を左右の手で握って開閉しながら効率よく風を送って、箕で穀物類を流し落としながら軽いものを飛ばす。江戸時代前期からおもに東日本で使われた。	
 せんぼうき 扇風機	脱穀した初と屑藁を吹き分けるための3枚羽の扇風機。クランクの根元に鋳物の歯車をつけて高速回転させた。	
 み 箕	穀類・豆類を入れてほうりあげたり揺すったりして実とごみを選別する用具。ここではD字形の片口箕を「箕」と定義し、同機能を持つ円形の「ばら」と区別した。江戸時代に唐箕が出現したことで、稲作の選別作業での箕の比重がやや低下した。	【箕】いしみ（粗い竹製）・いたみ（板製）・いたみー・うむい・おりみん・かわみ（木の皮製）・かーみー・さうひー・さんばらー・しのみ・しよーけー・しよーやぶり・すぎー・すーぎー・すーぎってーいー・せきなもん・せくなもん・せくもん・せつのもん・そいー・そーきー・そーきー・そーひー・たかみ・てみ・どいみ・とーし・とみ・はこみ（板製）・はりみ（紙製）・ふじみ・ふるみ・みーぞーきー・よぞり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【箕】かーみー・さんばらー・せくもん・そーきー・そろ・みーじよーきー・めかい 【初などを移す時に使う塵取形の農具】かしり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ばら	穀類・豆類を入れてほうりあげたり揺すったりして実とごみを選別する用具で円形に編んだもの。南九州から中国江南地方・東南アジアにかけて分布する。ばらは穀類や豆などを乾燥させる干し皿としてもよく使われる。	
 どうみ 唐箕	初摺臼にかけた後の初殻・玄米・糠の混じったものを風で吹き分ける選別器で、江戸時代に中国から伝来したため「唐箕」と呼ばれる。右半分は回転扇を太鼓胴で覆った送風部、左半分は選別部で漏斗・選別胴、一番口・二番口・三番口からなる。	【唐箕】あおり・こめあうち・とあおり・とあぶち・とーあおり・とーあぶち・とーし・とわうち・とわおり・とわぶり・とんぐり・はっばい・もみおろし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【唐箕】あうち・とあおり・とーあぶち・はっばい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 とおし 通し	浅い円柱形の枠の底に網を張って揺すりながら穀類などを選別するもの。ここでは民俗語の傾向から、ひとまず「とおし」＝農具、「ふるい」＝食物用と定義し、粉類をふるう用具は「ふるい」として食項目に入れた。	【目の粗いふるい】あらかんど・あらこ・しびとーし・ちゃぶれ・ちゃぶれー・やっこどーし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【目の粗い篩】さどーし・もみおろし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
<b>千石通しと万石通し</b>	『和漢三才図会』の「千斛筥（せんごくどおし）」は長らく農具と勘違いされてきたが、搗いた後の米と糠とを分けると書かれていて、これは台所用具であった。ここでは白米と糠とを分ける千石通しは台所用具なので農具から外し、玄米と初を選別する農具を万石通しと呼び分けることにした。	
 まんごくどおし 万石通し	唐箕の一番口から出てきた玄米と摺れ残り初を選り分ける道具で、漏斗に入ると傾斜網枠を流れる間に玄米は下に落ち、摺れ残り初は網上を流れて選別される。漏斗・傾斜網枠に網枠の角度を変える可動脚をつけた可動脚型と、傾斜網枠を固定して玄米の出口をつけた固定脚型がある。	

名称	説明	さまざまな呼称
 <b>べいせんき 米選機</b>	玄米に混じった屑米を選別するもので、形は万石通しだが金網ではなく細い鋼線を並べていて、玄米は線面上を滑り、屑米は隙間から落ちる。鋼線は2層になっていて、重なり具合で間隔を調整できる発明品。昭和の初期から40年代ごろまで使われた。	
 <b>ゆりわ 汰輪</b>	半切り桶大の曲物で、初摺り後の玄米と初殻・糠を入れて揺すって軽いものは上に集まる比重選別の原理で選り分けるもの。万石通しや大型の汰板の出現でほとんど見られなくなった。	
 <b>ゆりいた 汰板</b>	万石通しに掛けてもお玄米には初や小米が混じるのでそれを精選する比重選別器で、幅50cm長さ1mほどの前後に長い浅い木箱で、手前の側板の両端は左右に突き出た把手となり、先幅はやや細まっていて、底板には斜め網状の目が刻まれている。天井から吊して前後に揺すって使う。万石通しと併用して広く使われた。	
 <b>とます 斗枱</b>	1斗用の枱で、俵は4斗が標準だったので、玄米を俵に詰める時に容量の確認に斗枱を使った。2本の把手の突き出た四角い枱が元の形だが、桶構造の円形の枱も使われた。	
 <b>とかき 斗掻き</b>	枱に穀物を山盛りに入れ、棒で縁を擦って余分な穀物を払い正確な容量を量るための棒。斗枱でよく使ったので「斗掻き」と呼ぶ。	
 <b>もみじょうご 初漏斗</b>	穀物を俵や吠に詰める時に使う大型の漏斗。細竹で口縁部を大きく下部を細く筒状に編んでいる。大阪ではクライヌケ（喰らい抜け）。	【穀類を俵などに入れる時に用いる大形の漏斗】とのくち・こくくち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 <b>たわらしめき 俵締め機</b>	鋼鉄製の湾曲した雁木とワイヤーを組み合わせたもので、輪になった部分に俵を通し、レバー操作で俵を締めおいて縄で縛れば容易にきつく縛れる。俵締め機を外してまたセットしながら順次縛って仕上げる。	
<b>精米</b>		
<b>搗臼・摺臼・挽臼</b>	臼と呼ばれるものには、①杵で搗く精白や餅搗きの「搗臼」、②初から初殻を外して玄米を取り出す「摺臼」、③麦や大豆を粉にする「挽臼」がある。①は堅杵や横杵で搗くものと、足踏み式の踏臼（碓、からうす）があり、②には木製往復回転の木摺臼と、粘土に木歯を埋め込んだ土摺臼があり、③には麦や大豆を挽く石臼と、抹茶を挽く茶臼がある。搗臼は弥生時代に稲作民が持ち込んだもの。摺臼は古墳時代に朝鮮系渡来人が持ち込んだもの。挽臼は鎌倉時代に禅宗寺院の厨房に素麺・饅頭・饅頭など粉食文化とともに持ち込まれ、その後民間に広まったもので、伝来時期と系譜が異なる。	
 <b>こめつきうす 米搗臼</b>	輪切りにした大木を削りぬいた搗き臼のうち、精白専用の臼で、直径は大きく高さは低目で、縁が内湾して米が飛び出さず循環するように作られている。搗くときは藁束を芯にした輪を米の上に置き、輪の中を搗いて米の飛散を防ぎ循環をよくした。	【臼】きうす・くぼ・ちゃんから・てうす 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【臼】うすくぼ・くぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 <b>たてぎね 堅杵</b>	1mほどの丸棒の中段を握って上下して搗く杵で、握りの部分が細くくびれている。弥生時代に稲作とともに持ち込まれた古いタイプの杵で、兎の餅つきのイメージのほか、伝統行事では堅杵が多く使われている。	【棒ぎね】たてぎね 【柄がなく中央のくびれた部分を手で握ってつくぎね】きぎ・せんぼんぎね・ていあどうむ・てきぎ・てぎね・てぎね・てぎの・てつきぎ・てまぎね 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 <b>よごぎね 横杵</b>	杵部と柄がL字形につけられた杵で、中世に中国から伝来し、江戸時代を通じて堅杵に置き換わっていき、今日では餅つきには横杵が使われている。	
 <b>こめつきぎね 米搗杵</b>	餅つき杵より重い杵で、杵の直径20cmほどで重さは10kg前後。柄はやや鈍角につけられているものもある。米糠を取るのが目的なので、底面積を大きくして当たりを柔らかくし、粉米がでないようにしている。また柄を鈍角につけるのも振り下ろしたときに杵の底面が米に水平に当たるようにした工夫である。	
 <b>ふみうす 踏臼</b>	シーソー板の中ほどに軸を通して支点で支え、先に杵がついていて、反対側の端を足で踏んで米を搗く臼。古代に中国から伝来しカラウス（碓）と呼ばれてきた。関東地方では江戸時代に伝わった土摺臼を唐臼（カラウス）と呼んだため、名称の混乱を招いている。ここでは「物類称呼」（1707）の用例を採って「踏臼」とした。	【足踏み臼・碓】じがら・じがらうす・ふみうす・やくら・よこうす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 <b>みずからうす 水碓</b>	踏臼の人が踏む部分を水のためる槽とし、流れの水を笕で槽に注ぐと重さで下がり、水が流れ出ると軽くなって跳ね上がり、反対側の杵が米を搗くしくみ。バツクリとも呼んだ。	【水流を利用した米搗装置・そうす】うさぎつずみ・こと・さこんたろー・しかつずみ・そーずがらうす・ちよーずがらうす・ちよーたろー・つずみ・はしき・はったり・ほったり・みずなるこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
 すいしゃ 水車	流れの強い川に大型の水車を設置し、水車小屋内でその回転力を歯車でいくつもの突起のついた心棒に伝え、心棒の突起が堅杵の突起を押し上げては外れ、押し上げては外れることで、何本も並んだ堅杵で米を搗く。また歯車で回転力を石臼に伝え、小麦の製粉をした。	
藁製品・藁細工		
 むしろ 筵	筵は一般に藁を編んだ敷物と説明されるが編物ではなく織物で、筵機(むしろばた)に40本ほどの細縄を経糸としてセットし、横糸にあたる藁を左右に挿し込んで箆で打ち込んで織る。筵は長さ6尺(180cm)幅3尺(90cm)が標準で、初などを天日で干すときの敷物などに広く使われた。	【筵】いなばき・いなはきみしろ・いなばきみしろ・いなまき・いのはきみしろ・いまなく・うらむしろ・かわむしろ・このはね・すと・むっしょ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)
 ねこむしろ 猫筵	経糸としての細縄に藁束を前後から絡めて撚りあわせて編みつけていく「ネコ編み」で編んだ厚手の筵。クッション性があり、長さ290cm、幅163cm、厚さ3cmで穀物乾燥用などに使われる。また凹凸があるので鉱山での金銀などの選別に小型のねこむしろが使われた。ネコダ・ニクブクとも。	
 たわら 俵	米の保管・輸送に使われた藁製の円筒形容器で、容量は地域によって違ったが昭和に入って4斗が標準となった。俵は2重構造で、藁で編んだ藁を筒状にして胴体とし、底と蓋に棧俵をつけ、玄米を詰めて棧俵が外れないよう周りから細縄で籠目のようにかがってとめ、胴体の5ヵ所を縄で縛って仕上げた。	【俵】かまぎ・すご・どひゆー・どひよー・ふ 【米俵】いのこたわら 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)
 さんだわら 棧俵	藁で編んだ円形の蓋で、俵の底と蓋に使う。	【米俵の両口に当てる、わら製のふた】さばいし、さばやし、さんざらばし、さんざらばせ、さんだべーし、さんだらば、さんだらばし、さんだらばせ、さんだらばち、さんだらべーし、さんだらぼーし、さんだらぼし、さんだらぼち、さんだらぼちち、さんだらぼちち、さんだらぼちち、さんばーし、さんばあて、さんばいし、さんばし、さんばち、さんばやし、さんばやし、さんびやーし、さんびやし、さんぶし、さんべーし、さんべーし、さんべし、さんぼーし、さんぼし、たーらすぼ、たーらっぼし、たーらっべーし、たーらべっし、たーらんばーし、たーらんぼーし、たーらべし、たーらばし、たーらばす、たーらべあし、たーらぼちち、たわらすぼ、たわらっべーし、たわらばいし、たわらばし、たわらべーし、たわらぼーし、たわらぼちち、たわらんば、たわらんばし、たわらんばせ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【俵蓋(さんだわら)】えんざ・きよーつばし・さばいし・さんだらぼちち・さんどーじ・さんばいし・さんばし・さんばち・さんばやし・さんぶし・さんぶた・さんべーし・さんぼし・せんた、たわらばし、ちよーつべし、ばせ・はやし・きよっばし・さんた・ぼちち 以上、『標準語引き分類方言辞典』(東條操篇)
 かまし 俵	藁筵を二つ折りにして左右を藁縄で縫い綴じた袋状の容器で、幅も深さも90cm弱。米麦・雑穀・芋類・肥料・塩・鉱石などの輸送用の包装として広く使われた。	【俵】かちぶき・かまき・かまぎ・かまぐ・かまげ・くぐつ・けどし・こえくぶき・すみだつ・ぞーしんふくん・たつ・だつ・ひくつ・ひげこ・ひげなし・ふすま・まきがり・まついれ・まっがり・まっがり・めつき・めっけ・よつくぶき 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【俵】えなまき・かちぶき・かまき・かまげ・くぐつ・くぶき・だつ・めっけ 以上、『標準語引き分類方言辞典』(東條操篇)
 わらすぐり 藁選り	藁細工には、藁の株元のはかま(下葉)を除去する必要がある。千歯扱きの歯を間引いたものが多い。	
 わらうち 藁打ち	藁細工のために藁を打って柔らかくする横槌で、ケヤキなどの丸太を短く切って柄を削り残している。直径15cm前後、全高25cm前後。土間に据えた藁打石にわらすぐりをした藁束を置き、上下を返して何度も打って柔らかくした。	
 わらうちき 藁打機	大きな円形ハンドルに上下に接した2本の鉄製ローラーを連動させ、ハンドルを回して藁をローラーの隙間に噛ませ、隙間をくぐらせて藁を柔らかくさせる機械。ローラーは軸方向の断面が波打っており、上下がしっかり噛み合って藁を柔らかくする。	
 なわないき 縄織機	足踏みで機械を回転させ、2本の供給口に藁を入れると撚りが掛かって縄に絞られてロールに巻き取られるしくみ。全国で広く使われた。	
 たわらあみ 俵編み	俵や藁を編む道具で、股木を二つ割りにして逆さにした左右の脚に薄板の桁を渡し、等間隔に刻みを入れ、ツチノコに巻いた細縄を2本ずつ掛け、藁を横たえてはツチノコを前後に振りわけながら編む。コモゲタ(藁桁)、富山県ではアマダボウ。	【俵を編む道具】うま 以上、『標準語引き分類方言辞典』(東條操篇)
 むしろばた 筵機	筵を織る道具で構造的には織機。高さ、幅ともに150cmほどの四角枠に経糸にあたる40数本の細縄を箆を通して上下に張り、横糸にあたる藁を通して、箆を打ち込んで織った。	【筵を織る機】はたご 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)








名称	説明	さまざまな呼称
 あしふみきむしろばた 足踏み式筵機	筵機の横に足踏み機構を追加し、筵の動きと横縄を挿し込むサシ（差し）の動きを連動させたもの。効率が良く、筵の商品生産に活躍した。	
その他の収穫・加工用具		
 たけのこほり 筍掘り	長さ80～120cmの長い細身の鍬先に柄をつけたもので、筍を見つけると周りの土を少し掘り、地下茎から生えた位置の見当をつけ、柄を向こうに倒した状態で鍬先を打ち込んで根元を切り、柄を手前に引いて梃子の原理で起こす。このタイプは関西でよく使われるが、他に刃の長い唐鍬が使われることも多い。	
 ちゃつみかご 茶摘籠	茶の木の間に置いて茶葉を摘み入れる籠で運搬用も兼ねる。腰にさげる小型の籠を使うこともある。	【茶摘みかご】 ちゃつみぼーら、ちゃつんぼーら、ちゃまぎ・ぼぼら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ちゃせいろ 茶蒸籠	茶葉を蒸すための道具。円形の曲物製で、底には粗い通しのような網が張られており、湯釜の上に蒸気穴のついた台板を載せて蒸籠を重ね、蒸籠の網目の上に茶葉を載せて蒸す。	
 ほいろ 焙炉	蒸した茶葉を火の熱を加えて揉むための装置で、口のあいた長方形で腰の高さの炉の本体に鉄棧を渡し、助炭と呼ぶブリキ製で和紙を貼った浅槽をはめ込む。口径は180×90cmほどで、蒸した茶葉を筵に広げてさまし、助炭に入れて手で揉んで加工した。	
 ちゃみ 茶箕	竹製の箕に和紙を貼った製茶専用の箕で、焙炉で揉んだ茶を箕で掃すって悪い葉やゴミを取り除く。	
 ちゃぶるい 茶篩	乾燥させた荒茶の大きさを振りわけ、出荷に向けて大きさを揃えるのに用いる篩。底が方形の竹製の平織り網で、周りは円形でござ目に編み上げている。口径60cm前後。	
 ちゃつぽ 茶壺	茶を貯蔵・運搬するための壺で、口が大きく胴体が膨らんでいて、表面には反故の和紙を貼って湿気を防いでいる。中世では中国陶器が用いられたが、近世には信楽焼・丹波立杭焼・備前焼など西日本の陶器が使われた。	【茶壺】 ちゃぐり・ちゃぼち・じじり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ちゃばこ 茶箱	茶を貯蔵・運搬するための木箱で、板の継ぎ目には目張りをして湿気を防ぎ、全体に反故の和紙を貼ったものもある。江戸時代に茶の流通が拡大したのともなう茶壺より運搬に便利な茶箱が出現した。	

名称	説明	さまざまな呼称
----	----	---------

<b>畜産用具</b>	<b>河野通明</b>
-------------	-------------












<b>飼育用具</b>	
-------------	--
















 かいばおけ 飼葉桶	牛馬に飼葉を与えるための桶で、口径40～50cm、高さ30～40cmで厚手に作られている。富山県ではウマモン（馬の餌）オケ。把手に縄がついてある。大阪府の牛の共同飼育の農家では牛を使った家が桶に夕食の飼葉を入れて牛とともに翌日の家に届け、そこで食わせて、十分な飼料を与えているかを互いにチェックし合った。	【牛馬の飲料や飼料を入れる桶】うーまもんおけ・うしおけ・うしたれ・うまのふね・かいりよ・かいりよげ・かしおけ・かつしよけ・きつ・きつち・ぞーずたが・ぞーずたが・じよみずおけ・じよみずごが・ぞーずたご・ぞみずおけ・ぞみずばけつ・ぞんぞけ・だおけ・たらいおけ・たれー・となおけ・となため・どみどけ・はぎり・はみいれ・はみおけ・はんぎー・はんぎり・ほち・まーうけ・まーけ・まおけ・ろーずおけ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【秣（まぐさ）桶】うまぶね・かけおおけ・きつち・たいへ・つるしため・ふね・ますがた 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 まぶね 馬槽	馬小屋に設置する横長の飼葉入れで、厚板で上があいた形の槽形。東北地方でよく使われ、一木を刳りぬいたものもある。福島県でマブネ（馬槽）。	
 おしぎり 押切	牛馬に与える藁や草を食べやすい大きさに切る道具。台板に庖丁の刃を上向きに取りつけるものと、包丁を下ろして切るものがある。片手に藁や草を握り、もう一方の手で把手を下げ、押し切るのだが、把手を向こうに押し倒して切るタイプと、支点が向こうにあり手前に倒して切るタイプがある。	
 まめかすげずり 豆粕削り	家畜の餌にするため、直径40～50cmの厚みのある円盤状の大豆粕を削る道具で、明治後期から昭和10年代まで、中国から大豆粕が輸入されていた時期に使われた。	
 うまだらい 馬盥	馬の足を洗うための盥。直径70～80cm、深さ30cmほどの厚手の盥で、馬の足を入れるので、底を踏み抜かないよう、裏側に補強材を入れたものもある。	【馬の盥】そーだらい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

<b>牛馬の装具</b>	
--------------	--

 たづな 手綱	農作業中に牛馬を思うように統御し、また繋いでおくために使った縄。牛は1本手綱で左反転掣の日本では左手で掣の柄を持ち手綱は右手で使うが、右反転の高知県では左手で使った。馬は2本手綱。かけ声と手綱さばきで牛馬を前進させたり停止・方向転換させた。	【手綱】おいずな・おもいずな・おもずな・くちもと・はずな・はんな 【牛の手綱】おいなわ・こーや 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 くつわ 轡	馬を統御するために馬の口に噛ませる金具で、中央で連結した長さ15cmほどの鉄棒＝銜（はみ）の両端に鉄鑿をはめたもの。連結部分を馬に噛ませ、両端の鉄鑿に面懸をつけて馬の顔に装着し、また手綱をつけて馬を統御する。左右の手綱を引けば銜が馬の舌を圧迫するので馬は言うことをきく。	【轡】おもずら・おもて・したがね・たてご・はがみ・もくら 【馬の轡】いさらご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 おもがい 面懸	轡を固定するため馬の頭に掛ける紐で、轡と繋いだまま着脱する。馬を使わない時は轡の付かない面懸だけを頭に掛ける。	【馬の面当て】おもずら 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 オモゲー 面懸	轡とは別系統の馬の統御具で、オモゲーはオモガイの訛り。長さ30cmほどの少し内湾した2本の棒の上端を縄で繋いで馬の鼻に掛け、中ほどの穴に縄を掛けて馬の頭に掛け、下端の穴の一方に手綱を結び他方の穴を通して端を人が握る。手綱を引けば棒が締まって鼻を左右から圧迫して痛いので、馬が命令にしたがう。世界に分布するが日本では鹿児島県・沖縄県と北海道アイヌで使われていた。分類名は棒締頭絡（ぼうじめとうらく）。	
 はなぎ 鼻木	牛の鼻に細枝を曲げた輪を通し、手綱を結んで牛を統御するもので、ハナグリ（鼻線）とも呼ばれる。幼牛の鼻中隔の軟骨に穴をあけ、皮をむいた若枝を蔓のように曲げて通したもので、原型は蔓の両端を交差させて括ったものだが、10cm余りの角材の両端に蔓を通してD字形に仕上げたものが主流となっている。	【牛の鼻輪】はなかんた・はなぎ・はなぐり・はなずら・はなご・はなさし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はらおび 腹帯	鞍を牛馬の背に固定するための帯で、横木から牛馬の腹を回って反対側の横木に繋ぐ。名前は腹帯だが、鞍を置くのは胸の裏側なので腹帯は肋骨部分に巻き付けることになり、あまり締められない。そこで胸懸・尻懸（鞆）で前後方向にずれないように固定する。	
 むながい 胸懸	鞍を牛馬の背中に固定するため、鞍の前枠（前輪）から首の下に掛ける帯で、鞍が後ろにずれるのを防ぎ、また牽引力の一部を胸で受けて背中への負担を和らげる役割をもつ。	

名称	説明	さまざまな呼称
 しりがい 鞆	鞍の後杵（後輪）から牛馬の尻尾の付け根を回して鞍を固定する紐で、鞍が前にずれるのを防ぐ。	
 くつご 口籠	牛馬の口にはめて農作業中に作物を食べないようにする籠。竹籠や藁製がある。中耕・除草・培土など作物の成育した田畑で牛馬を使うときに用いた。	【牛馬の口をおおう物】くちご・くちびん・くちもっこ・くつご・くつのご・ふぐつ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 にぐら 荷鞍	馬・牛の背に荷物をのせるための鞍で、杵木の幅は70～80 cm、前後幅は40 cmほどの大振りな鞍。杵木の下に厚さ20 cmほどの藁を畳表などでくるんだ下鞍をつけてクッションとする。江戸時代の街道では1駄40貫（150 kg）、山道では32貫（120 kg）の荷を乗せて運んだ。	
 ばしゃひきぐら 馬車引き鞍	近代になって牛車・馬車が物資輸送の主役となったとき、農耕鞍をベースに生まれた荷車を引かせる鞍で、農耕鞍より頑丈に作り、左右に鉄帯を曲げた轅棒受けをとりつけ、引綱には鎖も用いる。鹿児島県では高さ98 cm、重さ12 kgの大振りな薩摩鞍が使われていた。	
 したぐら 下鞍	鞍の下に敷いて牛馬の背を保護する鞍床で、農耕鞍では稲藁や麦稈を編んでつくる。通常は長方形の藁座布団だが、北九州にはドーナツ型があり朝鮮系。これが明治時代に馬耕教師によって東北地方にも伝えられた。	【馬の鞍の下に敷く物】したびら・しと 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 うまのくつ 馬の沓	藁で作られた馬のはきもので、蹄を保護するためのもの。馬は蹄鉄を付けていないときで、荷物の運搬などのときに蹄の保護に履かせた。農作業では履かせない。牛の沓よりは大きく、蹄に掛ける鼻緒状の2本の小縄が特徴。	
 うしのくつ 牛の沓	藁で作られた牛のはきもので、蹄を保護するためのもの。荷鞍で荷物を運ばせる時に履かせた。農作業では履かせない。馬の沓よりは小さく、蹄に挟み込む1本の小縄が特徴。	
 ていてつ 蹄鉄	馬の蹄の底に打ちつけて蹄の摩滅や損傷をふせぎ、滑り止めをする金具。明治初期に陸軍が軍馬用に導入してから普及した。普通に使う尋常蹄鉄のほか、雪道・凍結地用の爪のついた氷上蹄鉄があった。	
鶏関係		
 とりふせかご 鶏伏籠	庭で鶏を飼うための伏せ籠で、シャモの飼育などに使われた。	
 とりのきゅうすいき 鶏の給水器	鶏に水を与える陶製の自動適量水やり具。釣鐘型の下部側面に穴があいており、水を満杯にして伏せる形でおけば、受け皿の水が蓋となって満杯の水は出てこないが、水受け皿の水を鶏が飲むと穴から空気が入ってその分だけ水が補給される仕組み。	

名称	説明	さまざまな呼称
<b>山樵用具</b>		河野通明
杣用具（伐採）		
<b>斧とヨキ</b>	斧は厚みのある刃に柄をL字形に挿し込んで、立ち木を切り倒したり、丸太を割ったり削ったりする刃物の総称。俗名ヨキ。10世紀初頭の『和名類聚抄』では「斧」はオノでヨキともいうと記していて、どちらも古代語。民俗語ではヨキが主流で中世文書でもヨキが見えることからすれば、古代・中世ではヨキが主流だったが、近世以降、出版物が増えるにつれ漢字をもつ斧が主流になり、漢字をとまわらないヨキは俗称になった可能性がある。	
 きりよき 切よき	山の木を伐採するときに使う斧で、打撃力が刃に集中するように刃渡りは短く薄手に仕上げている。木を山側に倒すときは切りヨキで山側に断面V字形の受け口をつくり、反対側から鋸で切って倒す。古くは切りヨキだけで木を切り倒していた。	
 はつりよき 削りよき	丸太の上に乗って側面を削（はつ）って角材に仕上げる斧で、効率よく削れるよう刃渡りを長くし、薄手に仕上げている。刃渡りを大きくするため蛤形だったが、軽量化して能率をあげるため首の部分を細くした改良型が現れた。	
 わりよき 割りよき	丸太を割って薪などにするときを使う斧で、刃渡りは短く断面はどんぐり形の厚手に作られている。刃で木口に食いつき、厚手の本体を打ち込んで楔のように押し広げて割る。薪用の柄の短いものもある。	
 まさかり 鉞	古代・中世に武器として使われた刃広斧で、甲冑の上からの攻撃用で『太平記』には刃渡り24cmのまさかりが使われている。刃渡りが大きい刃で側面形がハツリヨキと似ているので、ハツリヨキの別称となったと考えられる。	【大きな斧・まさかり】ぐぬ・はつりよき・はつり・はびろ・はんずま・さーふんゆーち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 よきのさや 斧の鞘	斧を持ち運ぶときに危険な刃に触れないよう、また刃を保護するための刃部のカバーで、角材に刃溝を切って縄で括りつける。岐阜県高山市ではハグツ（刃沓）と呼ぶ。	
 ぞうりんがま 造林鎌	木の伐採や植林作業で木の枝を払ったり、雑木を切ったりするのに使う大型の鎌で、長い柄に厚手の刃が鈍角についている。	【山刈りに使用する柄の長い鎌】かまがま・なたがま【枝を払うための鎌】なたがま・なたがんま・のぼりがま 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
木挽用具（製材）		
<b>横挽鋸と縦挽鋸</b>	山仕事の大型の鋸は伐採用の横挽鋸と製材用の縦挽鋸に分けられる。横挽鋸は木を横に引く伐採用鋸で、刃が交互に左右に振るアサリがあるが、丸太から板を引く縦挽鋸にはアサリはない。古代・中世では鋸は大工仕事の木の種類に限り、斧だけで樹木を伐採し、板を作るのは針葉樹を木目に沿って割っていた。中世に中国から2人引きの製材用の縦挽鋸が伝わり、近世には1人用の前挽が現れ普及した。伐採用の大型の横挽鋸の出現は、かなり後のようである。	
 やまのこ 山鋸	樹木の伐採用の大型の横挽鋸には多様な形態が見られるのでここでは「山鋸」で括った。刃は交互に左右に振るアサリをもつ。樹木の伐採には木を倒す側に斧で横V字の受け口を刻み、反対側から山鋸で挽いて木を倒す。樹の重みで鋸刃が挟まれ動かなくなるので、切り口からヤ（矢＝くさび）を打ち込んで隙間をつくって挽いた。ガンドとも呼ばれる。福島県只見では大坂の産地名でテンノウジと呼ばれていた。	
 めぬき 目抜き	伐採用の大型の横挽鋸のうち、鋸刃4本の次にアサリのない刃がつき、次におが屑溜めの深い挟りを入れるパターンを繰り返すもの。これで鋸を引くとおが屑が効率よく掻き出され、伐採の効率が上がって普及した。改良鋸・改良刃とも呼ばれる。	
 まえびき 前挽	伐採した太い材を板に挽く作業を木挽きというが、前挽は一人用の木挽鋸＝縦挽鋸で、大鋸（おが）とも呼ばれる。正確な厚さの板を引くために、鋸刃が左右にぶれないよう、鋸刃の幅を高くしているのが特徴である。	
 りょうびきのこ 両挽鋸	太い丸太を胴切りにするときに使った二人挽きの鋸で、全長120cm前後。	
 のこざや 鋸鞘	鋸を使用しない時に刃に被せる木製の鞘で、刃に被せて紐で固定する。鋸歯を守るためと怪我をしないよう、鋸鞘におさめて持ち歩いた。	

名称	説明	さまざまな呼称
 くさび 楔	丸棒の一端を平たく鋭角に尖らせたもので、立木を伐採する際に切り口に打ち込んで隙間をつくって鋸を引きやすくしたり、材を倒したり割ったりするときに用いる。頭の部分に鉄環をはめて打ち込み時の割れを防いだものもある。ヤ（矢）とも呼ばれ、総鉄製のカナヤ（金矢）もある。	【くさび】 つめ・や 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かわむき 皮剥	D字形の直線部に刃をつけ、円弧部の midpoint に長い柄をつけた樹木の皮むき用の道具。樹木を伐採すると、そのまま横たえて山で枯らすと、樹皮つきだと虫がわいて木を傷めること、川流しの際に沈みやすいので、山でまずカワムキで樹皮をむいて天然乾燥させる。	
 まわしがま 回し鎌	杉や松の樹皮は屋根葺きや壁材として貴重。この場合は決められた幅できれいに剥ぎ取ることが必要なので、マワシガマで上下2か所を横に1周して切り目を入れ、次に縦に切り目を入れ、そこに木製や鉄製の籠を挿し込んで剥いだ。	
 かわはぎへら 皮剥籠	マワシガマで切り目を入れ杉や松の樹皮と木部の間に挿し込んで起こして皮を剥ぐための籠で、木製・竹製と鉄製があった。春から夏にかけては水分を吸っているの、きれいに剥ぐことができる。	
ダシ（搬出）		
 かっしゃ 滑車	伐採した材を運び出すには古くからの木馬のほか、伐採現場から集材地へワイヤーロープを張り、滑車に材を吊して下ろすこともおこなわれた。材を吊す大きなフックが特徴で、木製のほか鉄製の滑車も使われた。	
 きんま 木馬	伐採した材木を山から運び出す種で、材木を積んでかすがいとロープで固定し、細丸太を枕木のように並べた木馬道を肩縄を掛けて引き、集積場まで運ぶ。下り道では木馬が暴走しないよう材木の重みを両肩で受けて足を踏ん張って一步一步下り、上り坂では木馬の方を向いて一步一步引き上げた。	【山から木材を運搬する種】 きうま・きじんま・きゅーま・きんま・どびき 【木材を運搬する種】 たまびき以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【木材を運ぶそり形の道具】 きうま・きんま 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 とびくち 鷹口	トビ（鷹）のくちばしのような鉄先を長い柄の先端につけた道具で、材木の運搬の際に鉄先を打ち込んで移動させたり反転したりする。	【鷹口】 かぎざ・とびかぎ・とびのはし・どつこ・とびんちよ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かん 鑿	鉄の楔に鉄環をつけたもので、材木の木口に打ち込み、綱を通して引く。トチカンとも。	
 かすがい 錠	鉄棒をホッチキスの針状に曲げ、両端を尖らせて材木同士を固定するもの。車やそり・木馬に積んだときに隣同士の材木に打ち込んで使う。	
 かくまわし	材木を動かすときに用いる鉄環つきの曲がった鉤で、鑿に棒を挿し込んで材木を動かすが、柄が固定されたタイプもある。	
 てこぼう 梃子棒	材木を持ち上げたり、移動したりするときに用いる2mほどの棒で、下端は材木の下に差し込みやすいよう平たく削っている。樹皮つきのものが見られるように、その場で適当な木を見つけて荒加工して使った。	
 やさいん 焼印	火で熱し、木に押しつけて加工者が誰かをしるす鉄製の印。木材の木口に付けて川流しの先でも持ち主の判別がつくようになり、桶の側材の樽丸の流通でも運搬先で加工者の判別がつくように焼印を押しした。	
炭焼用具		
 えぶり	炭竈から焼けた炭を掻き出し集める道具で、鉄製の長柄に掻き板をつけたもの。掻き板から柄まで総鉄製のものと、柄の末端はソケットになっていて木の柄を差し込み、長さ3mほどにして使うものがある。なお炭の掻き出しには専用の掻き出し棒を使うこともある。	
 すみふらい 炭篩	割竹を粗めに編んで通しにした片口箕で、炭俵に詰め残した炭を振るって粉炭を選別するもの。金網製もある。	
 すみだわら 炭俵	炭を運送するための俵で、茅で編んだ薦を綴じ合わせて本体とし、棧俵には柴を曲げて蓋とした。円筒形のほか、四角いタイプもあり、長さ52cm、33cm角ぐらいで重さは15kg。	【炭俵】 かやず・こも・ざつ・すご・すみすこ・すみだつ・だつ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）